

神戸女子大学古典芸能研究センター令和7年展示

「薦重」と仲間たち

～時代と文化のネットワーク～

展示図録



十人の狂歌名人と薦屋重三郎（左下、左から二人目） 『吉原大通会』より
(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892509>)

期 間：令和7年9月30日(火)～12月19日(金)

時 間：午前10時～午後5時 土・日・祝日休室

場 所：神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

(神戸市中央区中山手通2丁目 23-1 神戸女子大学教育センター2階)

今回は、「蔦重」こと蔦屋重三郎の生きた時代と街の本屋としての活動に焦点をあてた展示です。蔦重が生まれ育った江戸 新吉原、戯作や狂歌の作者たちとの交流、彼が才能を見出して世に出した絵師などについてわかりやすく解説します。また、古典芸能研究センターの蔵書を中心に、蔦屋重三郎（初代から四代目まで）が出版したさまざまな和書も紹介します。

なお、本展は今秋開講のオープンカレッジ特別講座「蔦屋重三郎とその時代」の関連展示です。昨年度に続き、本学文学部史学科「博物館実習」の受講生（4回生）が、学外実習の一環として展示の一部を担当しています。

〔出品リスト〕

	資 料 名	刊・写	刊年	文庫・コレクション名
1	よしわらさいけん 吉原細見	刊	寛政3年(1791)	志水文庫
2	ことりづかい 狂歌部領使	刊	寛政3年(1791)序	志水文庫
3	金撰狂歌集	刊	寛政8年(1796)	志水文庫
4	友なし猿	刊	寛政9年(1797)跋	志水文庫
5	ねぼけ 寝惚先生文集	刊	明和4年(1767)	志水文庫
6	つうしせんしやうち 通詩選笑知	刊	天明3年(1783)	志水文庫
7	つうしせん 通詩選	刊	天明3年(1783)	志水文庫
8	きやうしげんかい 狂詩諺解	刊	天明7年(1787)序	志水文庫
9	よも 四方のあか	刊	—	志水文庫
10	どうれ百人一首	刊	天保6年(1835)	志水文庫
11	えほんあずまあそび 画本東都遊	刊	享和2年(1802)序	江崎家旧蔵資料
12	〔北尾重政画 七福神図〕	刊	—	志水文庫
13	戯楽大全 栄花小謡千年緑	刊	明和2年(1765)	伊藤正義文庫
14	〔絵本あまの川〕	刊	寛政3年(1791)	志水文庫
15	狂歌百千鳥	刊	—	志水文庫
16	さるほどにさてそののち 去程扱其後	刊	—	志水文庫
17	八幡太郎一代記	刊	—	江崎家旧蔵資料
18	(複製) 風俗美人時計 巳ノ刻 囲	刊	—	志水文庫
19	じやうるりけいこどうけのみちゆき 浄瑠璃稽古道戯記行	刊	—	志水文庫
20	職人尽狂歌合	刊	文化5年(1808)跋	志水文庫
21	かはごろもの紀行	刊	文化4年(1807)	志水文庫
22	ちんせつゆみはりづき 椿説弓張月	刊	文化4年(1807)～ 文化8年(1811)	志水文庫

はじめに — 蔦屋重三郎について —

「蔦重」こと蔦屋重三郎という人物は、いまNHK大河ドラマの主人公として注目を集めています。

彼は吉原で小さな本屋を始めて、一代で江戸を代表する地本問屋（草紙類・浮世絵などの娯楽本を出版・販売する本屋）になり、書物問屋（学術的な書物を扱う本屋）となりました。天明期を中心に安永から寛政にかけて、文芸史上あるいは印刷・出版史上に特筆されるべき数多くの出版物を手がけています。江戸のいわゆる「天明文化」の大きな部分は、彼によって作り上げられた、あるいは彼の演出が施されたものであると言っても過言ではないでしょう。彼は、時流を見極め、時代を主導する卓越した才能の持ち主でした。店の経営は、特に寛政半ば以降は決して安穩とは言えませんでした、そんな中でも、戯作・狂歌などの洒落た文芸に係わる店のイメージを保持しつつ、その一方で書物類の大きな事業を画策していました。彼の思惑通りに草紙類・書物が全国的に新しい展開を迎えるのは、没後のことでした。

従来、蔦谷重三郎（以下「蔦重」）は、主として浮世絵師の喜多川歌麿や東洲斎写楽を世に出した人物として知られていて、それ以外で詳しく語られる機会は稀でした。しかし、彼の活動は実に多岐にわたっていて、若い頃から世相を敏感に感じ取り、様々な試みをしています。昨今、「コンテンツビジネスの風雲児」「稀代の名プロデューサー」などと称される所以です。

とりわけ注目されるのは、彼の作り出した文化的ネットワークとでもいうべきものでしょう。吉原に生まれ育った蔦重は、様々な階層の人間と係わり、場を共有していく中で、世の中を見据えていました。そして、面白そうなもの、皆が関心を持ちそうなもの、流行りそうなものを見出し、かたちにビジネスとして成立させていきます。そうした蔦重の活動によって、例えば、詠み捨てで楽しんでいた狂歌が「本」に仕立てられ、さらに美しい多色刷りの絵入り豪華本まで刊行されることになりました。

そんな彼のネットワークの様子は、前掲の『吉原大通会』にも窺われます。蔦重は^{おおた なんぼ}大田南畝（狂歌を読む時の狂名は^{よものあから}四方赤良）や^{あけらかんこう}朱楽菅江（それぞれ前掲図の③・⑤）をはじめとする文化人をしばしば吉原に招き、大文字屋（主人は狂名「^{かばち やもとなり}加保茶元成」、前掲図の⑫）や扇屋（主人は狂名「^{たかみのむねあげ}高見棟上」）

といった一流の妓楼（*当然のことながら吉原の狂歌グループ「^{れん}吉原連」とも縁が深い）に招き、宴を開いて、その交流のなかで多種多様な企画を進めていたとも言われています。蔦重自身も狂名を「^{からまる}蔦唐丸」と名乗る狂歌師仲間の一員であり、同時にこの交流によるビジネスチャンスを逃がさず、稀代の版元に成長していきます。

以下、蔦重とその仲間たち、そして彼らの文芸活動と蔦重の出版活動を見ていきましょう。はじめのコーナーでは、蔦重の関係略年譜を掲げ、蔦重の出版物とともに、大田南畝関係の資料を展示しました。続くパネルのコーナーでは、蔦重が生きた時代について、そして狂歌・戯作・浮世絵・吉原の順に、セクションに分けて解説します（パネルのセクションタイトルデザイン：稗田 芽依）。併せて、蔦重とゆかりのある絵師や作家たちの係わった出版物も展示しています。



「板元 蔦唐丸」の口上
(山東京伝『箱入娘面屋人魚』寛政3年(1791)刊より)
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892706>

江戸の狂歌名人たちと蔦重

恋川春町（作・画）『吉原大通会』天明4年(1784)より（7丁表・8丁裏）

（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892509>）



⑤ あけらかんこう
朱楽菅江

⑥ きのさだまる
紀 定丸

⑦ おおはらのくちい
大腹久知為

⑧ さかもりにゅうどうじょうかん
酒盛入道常閑

⑨ へづつのとうさく
平 秩 東 作

⑩ かほちやもとなり
加保茶元成

① つたのからまる
蔦 唐 丸
（蔦屋重三郎）

書名は、大通（通人たち）たちが吉原に会する意に、「費え」の訛り「つうえ」と謡曲「大会」をかけたもの。俳名「すき成」こと大通の遊さん次は、島原へ行く途中で子どもに捉えられた蔦を救う。すると、蔦が大通人「天通」となって、すき成を吉原へ伴う。すき成は天通のはからいで吉原菊葉屋の遊女きくん戸になり、大尽振舞いの遊びをする。狂歌の会を催すと四方赤良はじめ江戸の著名な狂歌師が集まる。画像はその場面。

本作は謡曲「大会」に作品の構想を借りつつ、通人社会をうがち、茶化している。俳名を「月成」という朋誠堂喜三二をかすめて「遊さん次」とし、当時知られた大通の文魚・十暁、狂歌師赤良・菅江・木網らのほか、吉原者、音曲家などを賑々しく登場させている。

④ もとのもくあみ
元 木 網

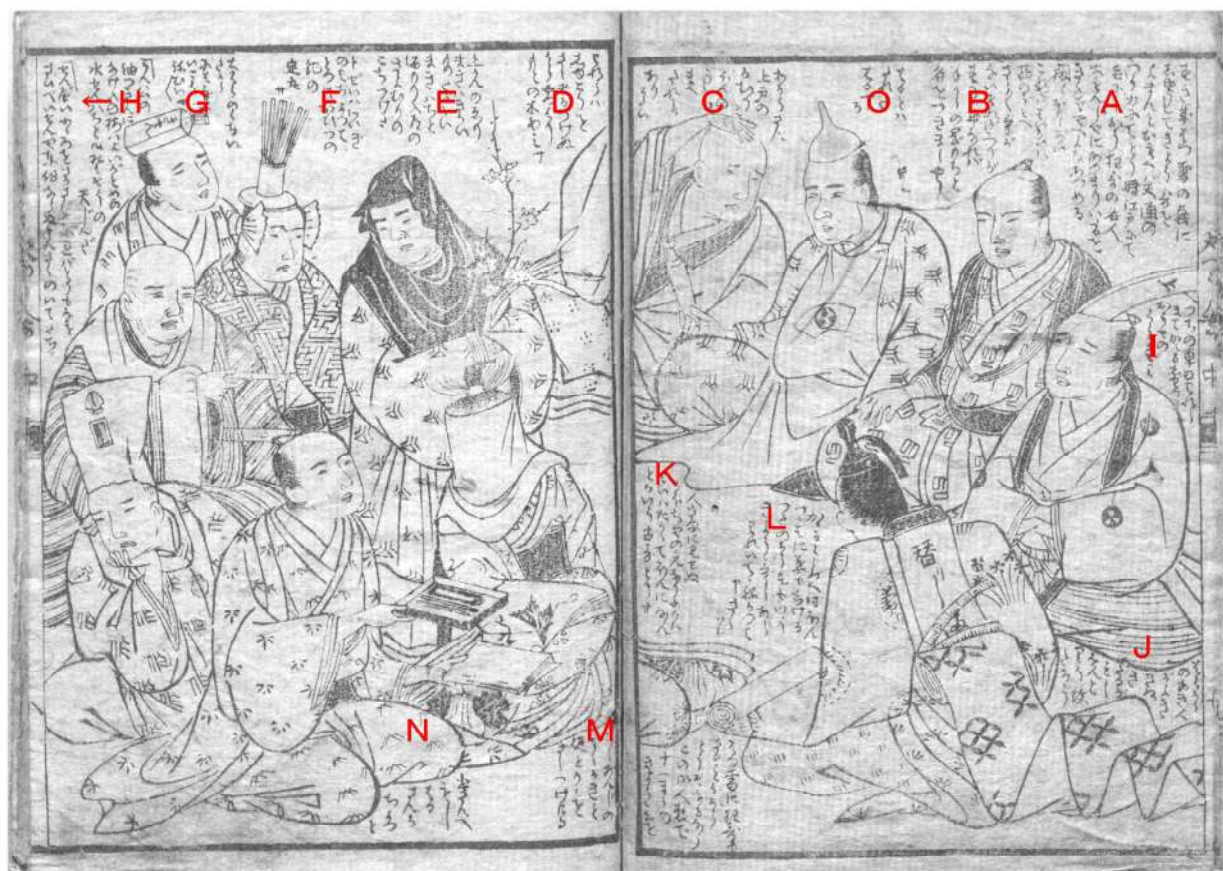
③ よものあから
四方赤良
（大田南畝）

② てがらのおかもち
手柄岡持
（朋誠堂喜三二
※俳名雨後庵月成）

⑫ おおやのうらずみ
大屋裏住

⑪ はらからのあきんど
腹 唐 秋 人

江戸の狂歌名人が集まったこの場面、皆それぞれの狂名に寄せたちょっと変わった恰好をしている。(以下、挿画の翻字)



- A すき成、初雪の興に乗じて、狂歌を詠まんと思えば、天通の通力にて、当時、江戸にて名にしおう狂歌の名人、大文字屋に集りいたるを、菊葉屋へ呼び集める。
- B (すき成)「扱々、面白い。これでは、俳諧は西の海へ、さら／＼気がない。
某、釣が好き成なれば、手柄岡持と名を付きましょう」
- C (木網)「赤良さん、上戸の冠と本の後前垂れもありがたい。吾らは趣向を作者が付けぬから、やっぱり元の木網さ」
- D (菅江)「上閑の襟巻はきついものだが、搔巻は、ちと、酒盛入道の清むりのこじつけど」
- E (定丸)「ト筮は経儀の道、よって、とつつおいつの紀定丸サ」
- F (くちい)「大腹久知為だから、煮花といこう。眠い／＼」
- G (常閑)「菅江の袖頭巾に投げ入れの梅はよいが、止めの水仙は、ちと、御粗相の天神だ」

H (東作)「煎餅袋^{せんぺい}を逆さに被れば、とりもなおさず、べいせん屋東作ならぬ頓作^{とんさく}の出で立ち」

I (裏住)「土の車の吾らまで、かゝる時節^{おおやのうらずみ}に大屋裏住」

J (秋人)「腹唐秋人^{はらからあきうど}がよききぬきたるがごとし。なんと竜紋^{りゅうもん}だろう」

K (元成)「人さまに、みせぬ加保茶元成^{かほちやのもとなり}ふりは、背は高くて、ほんに、なんとかいう古歌取りさ」

L かゝるところへ、日本堤に葉も繁る、薦唐丸^{つたのからまる}という狂歌師現れ出て、願って申さく「ソレ

M (「) 初雪に狂歌もさることながら、どうぞ、なるなら、この御人数で、十一幕の狂言を、即案じの即書き」と、硯と紙をさしつける。

N (唐丸)「直さんへ、もし、春さんが、ちょっと」

O (赤良)「春とは誰だ？春町か」

2 手柄岡持^{てがらおかもち} (朋誠堂喜三二^{ほうせいどうきさんじ}) = 主人公の「すき成」

自分は釣が好きなので、(俳名は「月成」(作中ではこれをもじって「すき成」)だが)(狂名は)手柄岡持と名付けようと言う。

3 四方赤良^{よものあから} (大田南畝^{おおたなんぼ})

酒屋で使う漏斗^{じょうご}を頭にかぶって前掛けをしている。「四方」は今も続く酒屋の名前で、前掛けにも店の商標(赤良が書き判としても用いていた)が入っている。四方赤良は酒(四方屋の銘酒「四方の赤」)を飲んで赤くなっている様子の意ゆえの装束。

4 元木網^{もとのもくあみ}

赤良の格好を見て、「赤良さん、漏斗の冠と前垂れ姿はご趣向だね。私何ぞは、趣向を作者が何も考えないから、やっぱり元木網で普段通りさ」と言う。確かに木網さんは普通の格好。

5 朱楽菅江^{あけらかんこう}

南畝と並ぶ狂歌界のリーダー朱楽菅江は、黒い頭巾に梅と水仙をさし、天神(=「菅公」^{かんこう})の姿。平清盛(法名「浄海」^{じょうかい})風の酒盛入道常閑(8)に向かって「その襟巻は素敵だが、搔巻^{かいまき}は、酒盛入道の清むり(ちとこじつけて無理)だね」とケチを付ける。搔巻は襦袍^{どてら}に似た夜着で、ここでは鎧に見立てる。

8 さかもりにゆうどうじょうかん 酒盛入道常 閑

清盛気取りの常閑は、「菅江（5）の袖頭巾に投げ入れの梅はよいが、止めの水仙はちとお粗末の天神だ」と返報する。御粗相の天神は、ととう渡唐天神の語呂あわせ。

6 きのさだまる 紀 定丸

四方赤良の甥の紀定丸は、占いで使うぜいちく筮竹を頭に被っている。「占いは儒教を学ぶ一法だが、とかく気が定まらず、思案にくれている紀定丸サ」と。

7 おおはらのくちい 大 腹久知為

茶葉（宇治茶「喜撰」）の袋を頭に載せた久知為は「腹がくちい（満腹だ）から煮花（煎じ立ての香ばしいお茶）にしよう。眠い、眠い。」と。

9 へづつのとうさく 平秩東作

平賀源内と親しく、蝦夷地探検の書籍もある煙草商の平秩東作は、煎餅の袋ををかぶって「煎餅袋を逆さに被れば、とりもなおさずべいせん屋東作ならぬ頓作（座興）の出立」と。自分の屋号「平原屋」を、逆さの煎餅袋でべいせん屋と洒落ている。

10 かぼちゃのもとなり 加保茶元成

吉原の妓楼大文字屋の主人・加保茶元成は、顔をすっぱり覆っている。「人さまに見せない加保茶元成ふりは、背は高く、ほんに、なんとかいう古歌気取りさ」と言う。これは大文字屋先代の村田市兵衛を歌った童謡「背は低うて鼻落ちる」のパロディ。

11 はらからのあきんど 腹 唐 秋 人

「あき人がよき衣きたるがごとし」は、『古今集』仮名序の文屋康秀評「詞はたくみにてそのさま身に負はず、いはば商人のよき衣着たらむがごとし」のパロディ。反物をあれこれかけてみているか。

12 おおやのうらずみ 大屋裏住

「土の車～」は謡曲「土車」の文句のもじり。大屋裏住は貸家を生業とすることからの名。

1 つたのからまる 蔦 唐 丸（蔦屋重三郎）

そこへ「吉原の日本堤（吉原手前の土手。俗に土手八丁）にも葉の繁っている」蔦唐丸という狂歌師が現れ出て、「ソレ、初雪に狂歌もさることながら、どうぞ、出来ることならこの御人数で、十一幕の狂言（芝居）を即興でお書きください」と硯と紙をさし出す。皆で即興芝居を、しかも十一幕も書けという。ふだんから蔦屋重三郎が作者たちにいつも無茶な依頼をしているであろう様子がうかがえる。

唐丸が「直さん（直次郎＝南畝）へ、もし、春さんが、ちょっと」と言うと、「春とは誰だ。恋川春町のことか」と赤良が答えている。

蔦屋重三郎 略年譜

和 暦	西 暦	事跡とできごと（＊青字は蔦重刊行作品）
寛延3年	1750	1月、蔦屋重三郎、江戸新吉原使用人の父・丸山重助と母広瀬津与の間に誕生。本名は からまる 柯理。
宝暦7年	1757	この頃、吉原蔦屋の養子となり、喜多川（北川）氏を継ぐ（通称 蔦屋重三郎）。
安永元年	1772	吉原大門五十間道並び、義兄・蔦屋次郎兵衛の店の一角を借りて書店「耕書堂」を開く。
安永2年	1773	この頃から「吉原細見」の卸し・小売りを開始（版元・鱗形屋孫兵衛との提携を図る）。
安永3年	1774	7月鱗形屋版の吉原細見『細見 あ あ 嗚呼御江戸』の編集（＝「改め」）に携わる。序文は平賀源内（筆名「福内鬼外」）。遊女評判記『一目千本』を出版。
安永4年	1775	7月、吉原細見『籬 まがきのはな 乃花』を出版。出版物広告が初めて吉原細見に載る。以後、本格的に吉原細見の出版に乗り出す。
安永5年	1776	1月、絵本『青楼美人合姿鏡』（北尾重政・勝川春章画）を出版。北尾重政と門下の絵師は、以後も蔦重版の出版物で活躍。朋誠堂喜三二、北尾政演（＝のちの山東京伝）と親交を深める。
安永6年	1777	朋誠堂喜三二作品の出版を始める。この頃より、浄瑠璃富本節の二代目富本豊前太夫と提携し（富本節の株を取得）、富本浄瑠璃正本の出版を始める。
安永7年	1778	蔦屋次郎兵衛の四軒隣で独立した店舗を構える。
安永8年	1779	富本節稽古本の出版を始める。
安永9年	1780	往来物、黄表紙の出版を始める。『大栄商売往来』、『新撰耕作往来千秋楽』、『伊達模様見立蓬菜』など。（往来物は主として手習いに用いられるいわば教科書で、江戸では地本問屋の出版物だった。）
安永10年 （天明元年）	1781	蔦重版の喜三二作『見徳一炊夢』が みるがとくいっすいのゆめ 大田南畝の絵草紙評判記『菊寿草』（役者評判記仕立ての黄表紙ラッキン）で高く評価され、御礼に南畝を訪ねて交流が始まる。狂歌仲間との関係を深める。
天明2年	1782	吉原京町の大見世・大文字屋に狂歌仲間を招いて宴会。
天明3年	1783	春の吉原細見『五葉松』から吉原細見の独占出版権獲得。この頃から狂名「蔦唐丸」を名乗る。この年は喜三二・春町・南畝などの黄表紙9点、洒落本4点などを刊行。正月刊行の南畝の狂詩集『通詩選笑知』は唐詩選の注釈書パロディで、前年の蔦重の依頼によるもの。歌麿の一枚絵もこの頃から多く手がける。大手の地本問屋・丸屋小兵衛の通油町の店舗（日本橋）を買収、9月に「蔦屋耕書堂」開店。吉原大門口の店は出店として存続する（蔦屋徳二郎（未詳）名義）。 ※この頃から狂歌流行の兆し。4月、浅間山大噴火が起こり、大飢饉が発生。
天明4年	1784	「蔦屋」類焼。特大判絵本『吉原傾城新美人合自筆鏡』、黄表紙『万載集著微来歴』など出版。 ※狂歌大流行、各「連」（狂歌グループ）所属の狂歌師が総結集する「大会」もしばしば開催された。
天明5年	1785	狂歌百物語の催主となり、それを『狂歌百鬼夜狂』として出版。黄表紙も多数刊行し、特に山東京伝の『江戸生艶気棒焼』が評判を呼ぶ。 ※十代將軍徳川家治没、田沼意次の失脚

天明 6 年	1786	極彩摺絵入狂歌本『 ^{あずまぶり} 吾妻曲狂歌文庫』(宿屋飯盛撰・北尾政演画)のほか、絵本 3 点(北尾重政画の武者絵本『 ^{やそうじがわ} 絵本八十字治川』、同じく重政画の江戸名所絵本『 ^{あずまからあげ} 絵本吾妻袂』、歌麿の江戸名所絵本『 ^{すずめ} 絵本江戸 爵』。※序は順に四方赤良、唐衣橘洲、朱楽菅江の狂歌界三巨頭)などを出版。
天明 7 年	1787	改革の影響で、大田南畝・朋誠堂喜三二ら武士層が戯作から離れる。「蔦屋」再度類焼。 ※天明の噴火と大飢饉に伴う打ち毀しや一揆が続く。5 月、家斉が十一代将軍となる。 6 月、松平定信が老中首座となり、寛政の改革が始まる。
天明 8 年	1788	鶴屋喜右衛門と山東京伝を伴い日光・中禅寺を回遊。正月、喜三二の『 ^{ぶんぶにどうばんこくどうし} 文武二道万石通』を出版、話題を呼ぶ。喜多川歌麿の絵入極彩色摺の狂歌絵本『 ^{えほんむしえらみ} 画本虫撰』、『 ^{しおひ} 潮干のつと』を出版。
天明 9 年 (寛政元年)	1789	初春に売り出した黄表紙『 ^{おうむがえしぶんぶのふたみち} 鸚鵡返文武二道』(恋川春町)が発売自粛となる。春町は奉行所の呼び出しに対して病を理由に応じず、死去(自害とも)。
寛政 2 年	1790	地本問屋の行事(世話役)として、版木屋仲間に地本問屋仲間の支配に就くよう願書提出。 ※5 月「書物出版取締令」「寛政異学の禁」発布。書物・草紙版行についての規制強化。 10 月、「地本問屋行事共申渡令」。絵草紙出版仲間が自主検閲を承知した 20 軒に限定される。
寛政 3 年	1791	書物問屋仲間に加。草紙類や錦絵のみならず、学術的な書物も出版できるようになる。 正月刊行の山東京伝の黄表紙『 ^{はこいりむすめんやにんぎょう} 箱入娘面屋人魚』に「まじめなる口上」を挿絵入りで掲載。 初春刊行『 ^{きょうかごりづかい} 狂歌部領使』に 5 首入集。3 月、洒落本『 ^{しかけがんこ} 仕懸文庫』『 ^{せいろ} 青楼屋之世界・錦之裏』『 ^{しょうぎぬがらみ} 娼妓絹簾』が発禁となり、発禁本に連座で身上半減の刑を受ける。作者の京伝は筆禍で五十日間の手鎖刑。 秋頃から曲亭馬琴を耕書堂に抱えることになる。
寛政 4 年	1792	前年からこの年にかけて、喜多川歌麿の錦絵『 ^{ふじんそうがくじつてい} 婦人相学十脉』を出版。全体的に洒落本を控え学術関連の書物を出版。風俗矯正政策と儉約の風潮の中での学問ブームを受けて、次第に書物問屋としての仕事に重きを置くようになる。10 月、実母の広瀬津与が死去、山谷正法寺に葬る。
寛政 5 年	1793	正月刊の歳旦狂歌集『 ^{ねんしり} 年始物申 どうれ百人一首』に 1 首入集。2 月、大田南畝に実母の墓碑銘を依頼、翌月に成稿。7 月、曲亭馬琴が伊勢屋(会田氏)に婿入のため耕書堂から退去。 この頃から地方への流通を構想、名古屋の書肆永楽屋東四郎版の『 ^つ つの文字』を江戸で販売。 ※7 月、松平定信罷免。出版統制や好学ブームはなお続く。
寛政 6 年	1794	5 月から翌年 1 月にかけての 4 期で、「東洲斎写楽画」「写楽画」落款の役者絵(黒雲母摺版画)を一挙に出版。秋頃から、十返舎一九を抱える。
寛政 7 年	1795	2 月以降、写楽版画の開版止まる。 3 月、伊勢松坂に赴いて本居宣長を訪問、宣長の随筆集『 ^{たま} 玉勝間』を江戸で販売。
寛政 8 年	1796	夏季に脚気を患い、秋には重病となる。9 月刊行の『 ^{きん} 金撰狂歌集』(銭屋金坪撰)に 1 首入集。 この頃、蔦屋耕書堂が所有する狂歌絵本類の版木の多くを大坂の版元に譲り渡す。
寛政 9 年	1797	自作の黄表紙『 ^{しんたいかいちやうりやくえんぎ} 身体開帳 略縁起』(三巻 3 冊)を出版。正月、3 月と大田南畝が見舞う。 5 月 6 日、脚気により死去、享年 47 歳。法名「幽玄印義山日盛信士」。 翌 7 日、山谷の正法寺に葬られ、撰文「喜多川柯理墓竭銘」(石川雅望)が寄せられる。
寛政 10 年	1798	曲亭馬琴による代作で黄表紙『 ^{にたまがしきつねのしかえし} 賽山伏狹狐修怨』(耕書堂蔦唐丸撰、北尾重政画)出版。 番頭の勇助(版元伊賀屋勘右衛門の妻の従弟)が「蔦屋重三郎」を襲名した。 以後蔦屋は四代目まで続いた(～文久元年(1861))。

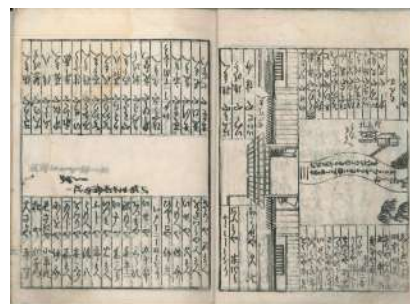
〔参考〕鈴木俊幸『蔦屋重三郎』(若草書房、1998 年)、鈴木俊幸監修『別冊太陽 319 蔦屋重三郎—時代を変えた江戸の本屋』(平凡社、2024 年)

よしはらさいけん 1 吉原細見

刊 中本1冊

寛政3年(1791)春 蔦屋重三郎刊

本資料は寛政3年春版で、序文は黄表紙・洒落本作者の山東京伝。『吉原細見』は、吉原遊郭内の遊女屋とそのお抱えの遊女の名前・料金を吉原の地図上に示し、茶屋や芸者、船宿の一覧なども付載した、いわば街歩きガイドブックである。遊女の異動を反映するために、年二回、春秋に定期刊行されるようになった。こうした最新情報を得て板元に伝えるのが「改^{あらため}」の役目で、若き日の蔦重の活動も、鱗形屋版細見の改を勤めることから始まった。



1 吉原細見

吉原細見の刊行は寛永19年(1642)から明治・大正まで続いた。その体裁が確立したのは蔦重が板元だった寛政年間である。蔦重は、鱗形屋細見が出なかった安永4年(1775)秋に、それまでより薄手だが情報量が多いスタイルで廉価な細見を刊行し、後に細見出版を独占することになった。巻末には蔦屋の蔵板目録(「耕書堂蔵板目録」)を掲載している。

〈志水文庫〉

ことりづかい 2 狂歌部領使



2 狂歌部領使

刊 半紙本1冊(三巻合)

寛政3年(1791) 蔦屋重三郎刊

頭^{つむりのひかる} 光編の狂歌集。寛政3年(1791)序。序文中に「唐衣橘洲^{からころもきしゅう}大人、宿屋飯盛大人、鹿津部真顔大人、紀定丸大人よたりの判のうちを乞て」というので、実質的な編者はこの判者4名だろう。本資料は所々に半丁分の欠丁あり、上・下巻と附録の3冊が元の形らしい。末丁は本の広告で「耕書堂蔵板目録 江戸通油町 蔦谷重三郎」と記す。この本が出たのは蔦重が身上半減の刑を受けた頃になる。

蔦重の狂歌は本書に5首入集している。

卯の花の雪の上ゆくくつて鳥二声三声ふみこんてなけ 蔦唐丸

定杭を秋の半にたつた姫之より左りあきの領分 蔦から丸

機も織花の錦の枝たれて水も汲ます棹鹿の妻 つたのから丸

春たつとこよみにあれは板行におしたることくかすむ山／＼ 蔦唐丸

わすられて又我ものとなるもうしひと度人にくれし命の 蔦唐丸

〈志水文庫〉

3 金撰狂歌集

刊 半紙本1冊

寛政8年(1796) 蔦屋重三郎刊

ぜにやきんらち 錢屋金埒(黒羽二亭)撰、けいさいまさよし 蕙斎政美(北尾政美)画の絵入狂歌本。序(酒月米人)によると、寛政8年6月に暑さしのぎに秋の題で詠んだ歌80首、「秋部」のみで「初秋」から「晩秋」まで秋のみの題詠を載せるといふ。政美は見開き3図(盆踊り図・海面の月に浜図・鷹狩図)、大和絵風の挿絵を寄せる。



3 金撰狂歌集

選者は一般には馬場金埒で知られる。錢屋は家業の両替商にちなむ。早くから狂歌に親しみ、天明狂歌の主要メンバーとして活躍、宿屋飯盛^{やどやのめしもり}、鹿津部真顔^{しかつべのまがお}、頭^{つむりのひかる} 光と狂歌四天王と称された。

画工の蕙斎政美は北尾重政門下の北尾政美(展示16・17参照)。

蔦重(刊行時46歳)は本書にも1首入集している。

4 友なし猿



4 友なし猿

刊 半紙本 1冊

寛政9年(1797) 蔦屋重三郎刊

五世市川團十郎(1741~1806、明和7年(1770)に五世を襲名)の、狂歌・俳諧・随筆集。俳名、梅童・男女川・三升・白猿・反古庵。狂名は花道つらね。自序、跋は六樹園(石川雅望)。内容は、巻頭に自画2図と「白猿狂歌集」「白猿発句集」「白猿ひとりごと」の三部構成で、それぞれ狂歌92首、発句91句、随筆16編を収める。

作者白猿は狂歌を通して蔦重とも交遊があったらしく、『金撰狂歌集』(展示3)等にも名が見える。当時すでに子の四世海老蔵に團十郎の名跡を譲って自らは^{えびぞう}鰯蔵、俳号の白猿を名乗っていた。本書は、刊行の前年暮れに引退して劇界の重責から解放された白猿が、自作をまとめたもの。作品は引退以前のものも含むが、引退後の自由な日々を楽しむ様子のもものが中心となっている。

〈志水文庫〉

5 寝惚先生文集

刊 小本二巻 1冊

明和4年(1767)

(江戸)切抜屋小文次、(京)嘉隆屋才七、(大坂)初編屋文十郎刊

大田南畝の初の狂詩集。南畝19歳の時、自作の狂詩20首ほどを平秩東作に示したのを書肆の申叔堂が見て出版の運びとなったという。風来山人(平賀源内)序、物茂らい(南畝)跋。本書は予想外に大きな反響を呼び、南畝の名も滑稽の達人として広く知られることになる。

本書の特色は、当時流行していた古文辞格調派の漢詩文集のパロディになっている点で、詩文の題材は江戸の風物と生活の諸相である。基調を成すのは明和期の江戸風俗を積極的に楽しもうとする心情だが、その一方で、貧窮を侘び、処世の困難を詠嘆する若き知識人の不安といった要素も指摘されている。本書は以後の狂詩文流行の先駆けとなった作品ゆえに、伝本も多く、異版や後印本の類も多い。本資料も初版で見られた見返し題を欠く。

〈志水文庫〉



5 寝惚先生文集

6 通詩選笑知



6 通詩選笑知

刊 中本 二巻 1冊

天明3年(1767) 蔦屋重三郎

大田南畝の2作目の狂詩集。本書に続き、翌年正月に『通詩選』(展示7)、天明7年正月に『通詩選諺解』(展示8)のいわゆる通詩選三部作を刊行した。題名は明和元年(1764)刊の唐詩選注釈書『唐詩選掌故』のもじりである。本書は、天明2年11月9日南畝の長男定吉の3歳の髪置の祝儀の際に、南畝邸に集まった滑稽文学の仲間達が酒席の勢いで作り挙げたものという。

内容は『唐詩選』五言絶句部のパロディ(冒頭「御見節句」は五言絶句)で、表紙の見返しや巻頭の「通詩選序」「戯言」も版本『唐詩選』のパロディになっている。最初の無馳走の「題変士別遊」は賀知章の「題袁氏別業」のパロディで、以下72首はいずれも作者と題と詩が原作のパロディであり(原

詩と韻も同じ)、それぞれに頭注を付した形も『掌故』の形式を模す。パロディは遊里や色情にこじつけたものが多い。

〈志水文庫〉

7 通詩選

刊 中本1冊
天明3年(1767) 蔦屋重三郎刊

四方山人(大田南畝)撰の狂詩集。紀定丸校。盛男里繁昌序、
腹唐秋人(南畝門下の中井薫堂)跋。校訂者の紀定丸は南畝の甥
(本名 吉見義方)。通詩選三部作の第2作で、李于鱗編『唐詩選』
の七言古詩のパロディ。大橋の「東方客」(原詩は王勃の「滕王閣」)
から平原芝の「夜鷹鼻歌贈折助様」(原詩は丁仙芝の「余杭醉歌贈
吳山人」)まで18首をおさめる。作者名と題名のみならず、詩も逐語的パロディとなっている。

本資料は、表紙見返しに「北郭全盛名代(不許乗物/遊里一興)/李不盡通詩選/東都鶏 日本房
趣行」。刊記は「天明三年癸卯正月日/江戸書肆/耕書堂 蔦屋重三郎梓」とするが、前年刊行の『通
詩選笑知』のものらしい。

〈志水文庫〉



7 通詩選

8 狂詩諺解

刊 中本1冊
天明7年(1771) 蔦屋重三郎

四方山人(大田南畝)撰。「通詩選三部作」の3作目。『唐詩選』
七言絶句のパロディ。『通詩選諺解』とも。表紙見返しに「四方山人
著/通詩選諺解/書肆 耕書堂梓」。

唐詩選七言絶句の諺解書(俗語や口語などを用いた分かりやす
い解説書)をもじった狂詩集。原詩にかたちや音を似せて作った

詩には、訓点・総ふりがな入り。漢字かな交じりの戯注釈を、諸書をあげつつ、分かち書きで付す。
書名は『風土記』『和名抄』などから『菅原伝授手習鑑』『吉原細見五葉松』、さらには「顔見世看板
口上」や「双六」「童謡」まで様々で、狂歌集や黄表紙もあげられている。

〈志水文庫〉

9 四方のあか

刊 半紙本 二巻2冊
(江戸) 蔦屋重三郎

四方赤良(大田南畝)の最初の刊行狂文集。現存諸本にはいずれ
も刊記はないが、天明7年12月23日付で版行許可は得ている(割印
帳)ので、同年末か翌年正月刊行らしい。ただし、割印帳には「四
方のあか 全二冊 飯盛著 板元西村源六」とある。巻頭に宿屋飯
盛(石川雅望)の序を載せ、巻末も飯盛名の狂歌で終るなど、飯盛作に仕立てた形跡が見られる。蔦
屋の刊記をもつ本やその蔵版目録までも載る本があることから、板元
も実際は蔦屋であったことがわかる。これは、刊行時期が寛政の改革
直前であり、当局の意向を憚って作者が町人の飯盛とまぎれるよう細
工をしたのではないかとされている。

内容は、上巻が天明2年までの32章、下巻が以後天明7年までの33
章で、個人の狂文集としては初の刊行である。平賀源内や横井也有の
影響が指摘されるが、さらに漢文調の歯切れの良さが文体の特徴とさ
れている。

〈志水文庫〉



9 四方のあか



9 四方のあか(刊記)

10 どうれ百人一首



10 どうれ百人一首

刊 中本1冊

天保6年(1835) 蔦屋重三郎(二代目)・和泉屋藤吉刊

しかつべのまが お きた おまさのぶ
鹿都部真顔編、北尾政演(後の山東京伝)画。寛政5年(1793)に蔦屋重三郎が刊行した、絵入り狂歌集の再版。百人一首は、江戸時代には基本的な教養として広く普及していた。本書は、歌人の肖像入り百人一首のパロディである『道化百人一首』の体裁をさらに模した、歳旦(新年)の狂歌集。書名の「どうれ」とは、年始の挨拶「ものもう(ごめんください)」に対する

「どうれ(どうぞお入りください)」から来たもの。蔦重も「蔦唐丸」の名で自詠を載せる。

編者の鹿都部真顔は狂歌作者で、戯作者としても恋川好町の筆名を持つ。もとは元 木 網門で天明4年頃に四方赤良門に入った(後に四方姓を譲られて四方歌垣・四方真顔とも)。狂歌の点料で生計を立てた最初の人とされる。天明7年頃には、金埒・頭 光・飯盛と合わせ狂歌四天王と称されるまでに

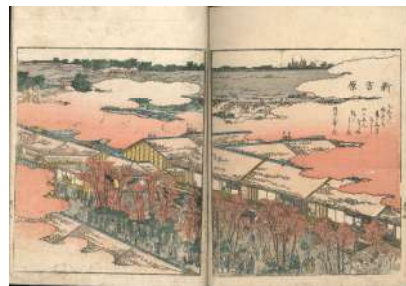
なった。
北尾政演は、後の山 東 京 伝。15歳頃から北尾重政門に入り画工としてスタートするが、安永9年『米饅頭始』で京伝戯作・政演画作として作者としても世に出た。以後、自画作の黄表紙を執筆する一方で狂歌にも親しみ、宿屋飯盛編の狂歌絵本にも腕をふるった。寛政3年(1791)に筆禍で手鎖刑を受ける(詳細別掲)までは、恋川春町や朋誠堂喜三二とともに黄表紙界をリードする存在として活躍した。以後はやや作風は変わったが、黄表紙のほかにも合巻・洒落本・読本など種々のジャンルで活躍した。

〈志水文庫〉

11 画本東都遊

刊 大本 三巻3冊

享和2年(1835)、(京)河内屋藤四郎、
(江戸)須原屋茂兵衛他3軒、(大坂)河内屋茂口口



11 画本東都遊(新吉原)

葛飾北斎画の江戸名所絵本。極彩色摺。本書のもとになったのは、北斎の本格的な絵本のさきがけとして、寛政11年(1799)春に蔦屋から刊行された墨摺の絵入り狂歌本『東 遊』。内容は、狂歌師の浅草菴市人が選んだ狂歌471首と名所29図だった。本書は、その絵丁だけを集めて、順番を改め彩色を施し、江戸名所絵本として再生させたもの。浅草菴市人の序は、年記部分を享和2年正月に改変しただけで他は『東遊』と同じ。そのため、江戸の名所を「なにかしか絵にうつさせ、例の友とちのされことを物して」云々部分は、「なにかし」(北斎)に写させたとするのはよいが、仲間の「されこと」(狂歌)を集めた点など内容に対応しなくなっている。



11 画本東都遊(蔦屋)

絵は、芝神明春景、日本橋、佃白魚網の千石船、新吉原仲の町の花見(右上掲出)など景観図が大半を占める。人の表情が判別できない細密な線描が特徴で、後続の名所絵に与えた影響は大きいとされている。

景観図のほかには有名な店舗を描いた半丁の図がいくつかあり、左に掲出した「絵草紙店」図もその一つ。これは蔦屋の店先を描いたもの。店名は記していないものの、暖簾には「耕書堂」の文字と富士山と蔦の葉の家紋があり、店先の行灯には、「通油町／紅絵問屋／蔦屋重三郎」の文字が見える。(こうした箱看板は幕府御用達の証であった。)紅絵とは多色摺浮世絵版画、つまり錦絵である。

〈江崎家旧蔵資料〉

12 〔北尾重政画 七福神図〕

刊 柱絵 一枚摺

宝船に乗った七福神図の柱絵。柱絵のサイズは浮世絵版画の判型の一つで、縦2尺3寸（約69cm）、横4寸（約12cm）の丈長奉書を横四つに切った大きさ。柱絵は、柱隠しの絵、柱掛けともいわれ、掛物に仕立てて柱に掛けたりして楽しまれた。

宝船に七福神を取り合わせる画題は、多くの絵師が手がけている。江戸時代には、吉運を招く夢を見るために宝船の絵を枕の下に敷いて寝る風習が広まっていたからである。空には鶴が飛び、海には亀が泳ぐ。そしてめでたい回文歌（上から読んでも下から読んでも同じ）「なかきよのとをのねふりのみなめさめなみのりふねのをとのよきかな」が入るのがお決まりのパターンだった。

本図は、定番の図柄に加え背景に富士山を配しており、七福神の恵比寿が持つ大福帳には「長久屋孫太」の文字が見える。大福帳は商家で日々の売買勘定を記した元帳なので、分厚い大福帳は商売繁盛、そして長寿と子孫繁栄を感じさせる。

絵師の北尾重政（1739～1820、号は紅翠斎、花藍）は、蔦重との係わりが深い人物である。蔦重が出版に乗り出した時期にはすでに人気絵師だったが、蔦重の最初の出版物『一目千本』の絵を描いている。以来、黄表紙、狂歌絵本、錦絵など蔦重と多くの仕事をした。安永・天明期（1772～1789）に最盛期を迎えた重政は、半世紀以上にわたって絵師として活躍したが、仕事の中心は版本で、作品は絵本や挿絵の数が圧倒的に多いのが特徴。指導力もすぐれており、北尾派として政演（山東京伝）、政美（鋏形蕪斎）、窪俊満らの偉材を育てた。

〈志水文庫〉



12 七福神図

13 〔戯楽大全 栄花小謡千年緑〕

刊 半紙本 1冊

明和2年(1765)9月 (江戸) 須原屋茂兵衛 刊



13 戯楽大全 栄花小謡千年緑

観世流の小謡本。本文は、延享3年刊の敦賀屋吉文字屋本（『小謡千秋楽百番』）またはその原本の正徳2年刊糸屋本（『当流百番／大観小謡童子宝鑑』）を覆刻したもの。頭書には手がかえられており、いろは歌尽しをセツ伊呂波・名頭字尽しに変更し、また篇冠尽しを改刻している。さらに目先を変えるかのように、目録の後、第1丁に北尾重政写の能「難波」図を加えている。

重政は当時二十代で、初期の仕事の一つである。これは、本書を刊行した須原屋茂兵衛が、重政生家の書肆須原屋三郎兵衛（小伝馬町1丁目）の本家であることも係わっているか。

〈伊藤正義文庫〉

14 〔絵本あまの川〕

刊 半紙本 三巻3冊

寛政3年(1772)刊

やどやのめしもり
宿屋飯盛（石川雅望）編の狂歌絵本。北尾重政画。序は寛政2年(1771)の七夕（「庚戌七月七日」）で翌年刊行。本資料は上中下三巻の3冊構成で、絵だけを上・中の2冊にして狂歌は下巻に纏めているが、本来は二巻2冊か（上巻末尾の織女と中巻冒頭の牽牛の図は対となる）。上・中巻は見開き9図と半丁のものが3図。冒頭に天の川を挟んで立つ牽牛・織



14 絵本あまの川（冒頭部分）

女の姿があり、以下は宮中で七夕行事や庶民の七夕の様子などが描かれている。下巻の狂歌もすべて七夕にちなむ。

なお、本書には寛政9年(1778)正月の大坂の和泉屋源七の刊記をもつものもあり、「萬基堂蔵板絵本目録」全10冊を併載する。ここには本書『絵本天の川 全二冊』とあり、そのほかに萬重刊行の絵本の書名ばかりが並んでいる。
〈志水文庫〉

15 狂歌百千鳥



15 狂歌百千鳥

刊 半紙本 画帖装 1冊

芍薬亭長根編の狂歌絵本。(北尾重政画。)遊女など当世美人画の狂歌絵本。総ての見開きが絵で、1面に2～3人の美人画に、2首～数首の点取り狂歌を配す。絵は極彩色刷りで、背景は描かれない。掲載された狂歌は江戸のみならず地方在住者の作も多く、狂歌の流行ぶりと書籍流通の広がりがうかがわれる。

狂歌師の芍薬亭長根は、本阿弥光悦七世の子孫で代々鑑定を業とした。天明の初期に朋誠堂喜三二(手柄岡持)の門で戯作を学び、二世喜三二と称したがふるわず、もっぱら狂歌で活躍をした。特に天明狂歌の諸大家(天明四天王)の没後、文政調の一派を立て江戸狂歌壇の中心となった。
〈志水文庫〉

16 去程扱其後

さるほどにさてもそののち

刊 中本 1冊
和泉屋市兵衛刊

黄表紙「新版 喜三二夢物語」上巻のみ。唐来参和作、北尾政美画。本資料は紙の上下が切られて余白が少なくなっている。

書名は時代物の浄瑠璃の冒頭の文句をそのまま使う。初丁表の序文は、通常とは趣が異なる脚本の体である。外題に「喜三



16 去程扱其後

二夢物語」(表紙写真参照)とあるように、朋誠堂喜三二の『気散次夢物語』のスタイルを踏襲しており、一場面ごとに新しい人物が登場して事件が起こるさまが面白可笑しく語られる。

最後の場面は、作者三和が机にうつ伏せて眠っており、その夢の中では喜三二が横になって夢を見ている様子が描かれる。「かくて時過ぎけ口、されば十五張の草子の趣向も、まことは夢の中なれば、皆消え消えと失せ果て、さんだんの枕の上に、夢また夢は覚めににけり」。なお、作中に使われた元の話は、すべて喜三二とは別の場面が選ばれている。



16 去程扱其後(表紙)

作者の唐来参和(どうらいさんな) (?～1810) は戯作者で、狂名は質草少々(しちくさのしょうしょう) (赤良門)。

通称を和泉屋源蔵。出自は武士だが天明(1781～89)初年に町人となり、江戸本所松井町の娼家和泉屋の入婿となった。初作は天明3年(1783)刊の洒落本『三教色』(歌麿画)で、以後は奇抜な趣向と滑稽の才を駆使して主に黄表紙を書いた。寛政元年(1789)に松平定信の改革政治を揶揄した黄表紙『天下一面鏡 梅鉢』で絶版処分を受ける。2年間絶筆の後に再び筆を執り、寛政10年頃まで活動を続けた。

絵師の北尾政美は、北尾重政(展示12～15参照)門下の絵師。天明元年から「政美」の号で寛政8年(1796)まで黄表紙挿絵その他、絵本類・地誌・随筆などの挿絵で活躍する。天明後半からは錦絵も制作する。美人画もあるがむしろ武者絵が多い。寛政6年(1794)5月に美作の津山侯のお抱え絵師となり、後年は主命で狩野派を学ぶ。この頃から戯作の挿絵は描かなくなった。
〈志水文庫〉

17 八幡太郎一代記

刊 半紙本 五巻5冊
仙鶴堂 鶴屋喜右衛門刊

奥付「庸畫 紅翠齊門人 北尾恵齋政美／彫工 山口彌七郎／江戸通油町 仙鶴堂鶴屋喜右衛門」柱題は「奥州軍記」。八幡太郎（源義家）の一代記。

月池隠士万象亭（森羅^{しんら}万象^{ばんしょう}一世）の序に「此前九年^{せんくねん}の粉本^{まほん}ハ画工^{しん}政美^{せま}が神に逼るの丹青^{たんせい}」とあり、本作の舞台が前九年であると説明し、政美の画が真に迫っていると賞揚する。本文の画面構成は絵が主体の黄表紙風。物語は朱雀院期の長暦元年、相模守源頼義が結婚して岩清水八幡宮に詣でる場面から始まり、五巻末、康平六年二月に源頼義、義家、義綱、清原武則が帝に謁見し、頼義は従五位下・出羽守を仰せ付けられ、それぞれに勲功を受ける場面で幕を閉じる。武人の姿を描くのを得意としていた政美の腕の見せ所だろう。後に十巻1冊の後印本（「奥州軍記」「八幡太郎一代記 絵尽」）が鶴屋と丁子屋との相板で出版されている。



17 八幡太郎一代記

〈江崎家旧蔵資料〉

18 〔複製〕風俗美人時計巳ノ刻 囲



18〔複製〕風俗美人時計巳ノ刻 囲

刊 一枚摺

和泉屋市兵衛（泉市）刊

喜多川歌麿の連作美人画「風俗美人時計」複製（縮小）のうちの1枚。本資料は寸法が縦29cm×横22cm。元判は大判錦絵（縦約38.6cm×横約24.5cm）。

この揃物は、女性の行状を時間で描き分けた先行の「娘日時計」（日時計ゆえ夏の昼間なのか、辰巳午未申の5枚のみが知られる）に続くシリーズで、時をタイトルに入れて、さまざまな仕事の女性の風俗を描く。本資料は巳ノ刻^{かこい}・囲。「巳ノ刻」は午前10時頃。囲い者の女性の朝の身支度を始める様子か。ほかには子ノ刻から順に、子・妾、丑・辰巳、寅・契情^{けいせい}、卯・下女、辰・嬬^{やもめ}、午・神子、未・娘、申・茶屋、戌・女房、亥・芸者。酉ノ刻のみ不明で全11枚が知られている。一日を12に分け、赤ん坊を抱く下女から、妾と囲い者、深川芸者（辰巳）と柳橋芸者なども描き分けている。女性の一日の行状を描くという発想から、この後、吉原の遊女の日を描いた人気作品「青楼十二時」が生まれた。

歌麿は寛政期には江戸の美人画絵師として多くの美人画を手がけている。とりわけ、いわゆる大首絵と称する美人半身像スタイルを開拓し、名妓や茶屋女などの姿を描いて流行随一の絵師となった。一般女性を描く風俗画は、日々の暮らしの様子がうかがえるような作品が特徴的である。

〈志水文庫〉

書肆 和泉屋市兵衛について

和泉屋市兵衛（甘泉堂）は、芝神明前三島町の書肆で、貞享3年(1686)から名が見える老舗。地域的に書肆は日本橋界隈が一流どころであり、芝神明前の諸版元は格下の扱いだった。当初は仏教・学術関連の書籍を扱う書物問屋だったが、四代目和泉屋市兵衛の寛政年間（1789～1801）から、娯楽作品、絵本や黄表紙、浮世絵版画を出版する地本問屋へと転じる。（蔦重とは逆をいったことになる。）四代目泉市は、絵本や黄表紙、浮世絵版画を企画・制作し、地域出身の作家や絵師をプロデュースして大成功した。特に、初代歌川豊国を見出したことで知られている。

その後も、初代豊国と四代目泉市はタッグを組み、絵本、洒落本、狂歌本の挿絵、美人画を次々と出版。すべてが大ヒットとなり、初代豊国は、人気浮世絵師として不動の地位を確立することになった。

一枚摺 1枚

A traditional Japanese woodblock print illustration of a landscape. The scene features a river or lake in the foreground with a small boat. Lush green trees and foliage are scattered throughout the landscape. In the background, there are mountains and a small settlement with buildings. A red circle is drawn around a specific area in the lower left corner, highlighting a particular feature or text. The entire image is filled with vertical columns of Japanese text, likely a haikai poem or a descriptive text related to the scene.

「富本桜」
▲この桜さくらはいいせの／白子しろこのふだ
んざくらに／ひとしく春秋はるあきの／
かぎりなく／花はなをひらき／その
くはに／句くひも／また四方よもに芳かんばしく／
九州きゅうしゅう豊前ぶんぜんまでも聞きこえて／一家いつかを
なせり／さくら草さくらの砂糖さとう漬つけ／な
ど／誉ほめるなり

かけの松」「名取川」「太鼓 19 浄瑠璃稽古道戯記行
 ばし」「かんごゐ」。そして手前に並ぶ「常磐の津」「清元の森」「富本
 櫻」がそれぞれ常磐津節・清元節・富本節のもじり。富本節は今は絶
 えてしまったが、江戸期には常磐津・清元と並べられていたことが分
 かる。

薦重が正本・稽古本の出版独占契約を結んだ二代目富本豊前太夫は、美声と卓越した表現力で人気を博していた。その芸術性も評価は高く、茶人としても名高い松江藩十代藩主松平治郷からは俳句と桜草の紋所（家紋）を拝領している。「富本の桜」なる所以である。

〈志水文庫〉

[illegible]

20 職人尽狂歌合（江南画）



北溪画

刊 半紙本 一卷2冊
 蔦屋重三郎 文化5年(1808)刊

六樹園飯盛(石川雅望)判詞、文亭一通編(跋)、魚屋^{ととや}北溪・江南司馬^{きゆう}伋(司馬江南)画。二代目蔦屋刊。在来の職人歌合の体裁に倣い、文化4年(1807)5月に狂文亭で催された狂歌合に、宿屋飯盛の判詞をつけたかたちで編纂した狂歌本。花・郭公・月・雪・

恋の題を、職人尽歌合の形式をとって左右が詠み合い、飯盛が種々の判詞を与えている。職種は重複を除き107種。各題の作詠を記すはじめの丁ごとに、北溪と司馬伋とが交互に、職人歌合風の気分の漂う挿絵5図（1図中に一對の組み合わせ）を付す。北溪（上掲右図（角力／陰陽師）を含め3図）は北斎流筆致の当世風の人物、司馬伋（上掲左図（傘貼り／仏師）を含め2図）はやや『七十一番職人歌合』の挿絵風の風俗画様で描いている。〈志水文庫〉

〈志水文庫〉

21 かはころもの紀行

刊 大本 二巻2冊
(尾) 永楽屋藤四郎、(江) 蔦屋重三郎、(大) 河内屋太助
文化5年(1808)刊

上方狂歌紀行。^{てつごうしなみまる}鉄格子波丸著、^{にわとうけい}中井藍江・丹羽桃溪画。跋文の後に、「かはころものき 後編二冊嗣出」と予告があるが未刊か。

文化なにながしの年(元年～3年の意か)の正月に大坂を発ち、京經由で東海道を江戸に下る紀行文。本書は後編未刊のため、江戸には至らず「かん原」で終わっている。親しい翁と商用を兼ね

た旅なので行く先々で名所旧蹟を訪ねようとしたが、充分果たせなかったという。諸所で多くの狂歌を詠んでおり、帰坂後に名所図会類などを参照しながら紀行文を綴ったらしいことがうかがわれる。

書肆は尾張の永楽屋、大阪の河内屋と二代目蔦屋。河内屋が主導であろうが、上方の本の出版に係わった事例として重要。晩年の蔦重の思いがかたちをなしたとも言えるだろう。〈志水文庫〉



21 かはころもの紀行

22 椿説弓張月



22 椿説弓張月(巻之一第1回冒頭)



22 (巻一、19丁裏・20丁表)

刊 半紙本 二十八巻30冊
文化4年(1807)?～文化8年(1811)
(江) 平林庄五郎(後編巻一～六は平林庄五郎・西村源六)刊

曲亭馬琴作、葛飾北斎画の読本。二十八巻29冊。前編は文化4年(1807)、後編・続編は翌年、拾遺は文化7年(1810)、残編は同8年(1811)年刊。本資料は、全編刊行後に字句・挿絵等を一部改変して出された30冊本。

書名の「椿説」はすなわち珍説。正史で不遇であった源為朝^{ためとも}を活躍させ、史実の間隙をぬってその不備を補う意を示す。馬琴最初の本格的な史伝小説で、中国清代の白話小説『五虎平西前伝』に史実と虚構をないまぜにする手法を学び、不遇の英雄を歴史の成功者に仕立てて、大衆の判官びいきの心情に訴えた。雄大な建築的構想と絢爛たる文章とが相まって『南総里見八犬伝』と並ぶ傑作とされる。

〈志水文庫〉

馬琴と北斎 ―蔦重の見出した者たち―

葛飾北斎は、役者絵の大家であった勝川春^{しゅんしょう}章の弟子であり、勝川春朗を名乗っていた頃から蔦屋耕書堂にも出入りをしていた。蔦重は彼に絵師の仕事も依頼している。しかし、北斎はその後に勝川一門から離脱したこともあり、再びともに仕事をする機会はなかった

一方、曲亭馬琴は、武家に生まれながら青年の頃から作家になることを夢見て、山東京伝に弟子入りを志願する。それは断られたものの、蔦重を紹介され、見習いとして蔦屋耕書堂で働くことになった。真面目で武家出身のプライドもあった、堅物の馬琴は、なかなか商人の生活にはなじめなかったらしく、苦勞しながら執筆を続けていた。

そんな二人は蔦屋で出会い、ともに仕事をするようになる。最初の仕事は、黄表紙^{はなのはる}『花^{しらみのみちゆき}春風道行』(寛政4年(1792)刊)だった。この頃、馬琴から聞かされた話が「北斎」の名の由来と

なる。やがて蔦重亡き後の文化4年(1807)、馬琴が北斎にあらためて挿画を依頼したのが長編の『椿説弓張月』である。この作品は、源為朝が琉球にわたって国を作るという冒険物語で、江戸時代には後の有名作品『南総里見八犬伝』よりも広く親しまれていたと言われている。

北斎は馬琴の家に住み込み、一時は作家と絵師として二人三脚の仕事をしていた。だが、挿画にたえず自己流解釈を加える北斎と馬琴はしばしば意見が対立、『占夢南柯後記』(文化9年(1812))で決裂し、以後は互いに独自の道を歩むことになる。

ともあれ、この『椿説弓張月』をきっかけに北斎は有名な絵師となり、馬琴は著名作家に成長していく。これもまた蔦重の仕込みが花開いたというところか。

〔主な参考文献〕

○蔦屋重三郎関係

鈴木俊幸『蔦屋重三郎』(近世文学研究叢書9) 若草書房、1998年

鈴木俊幸『新版 蔦屋重三郎』平凡社ライブラリー、2012年

鈴木俊幸『蔦屋重三郎』平凡社新書、2024年

鈴木俊幸監修『蔦屋重三郎：時代を変えた江戸の本屋』(別冊太陽319) 平凡社、2024年

田中優子『蔦屋重三郎 江戸を編集した男』文春新書、2024年

増田晶文『蔦屋重三郎：江戸の反骨メディア王』新潮選書、2024年

松木寛『蔦屋重三郎：江戸芸術の演出者』講談社学術文庫、2002年(※初版1988年日本経済新聞社刊)

佐藤至子『蔦屋重三郎の時代：狂歌・戯作・浮世絵の12人』角川ソフィア文庫、2024年

○大田南畝関係

中野三敏ほか校注『寝惚先生文集・狂歌才蔵集・四方のあか』(新日本古典文学大系84) 岩波書店、1993年

浜田義一郎『大田南畝』(人物叢書102、日本歴史学会編) 吉川弘文館、1963年

濱田義一郎ほか編『大田南畝全集』全20巻・別巻、岩波書店、1985～2000年

小林ふみ子『大田南畝 ―江戸に狂歌の花咲かす―』角川ソフィア文庫、2024年(※初版2014年岩波書店刊)

○狂歌

杉本長重ほか校注『川柳 狂歌集』(日本古典文学大系57) 岩波書店、1958年

吉田幸一・倉島須美子編『狂歌百鬼夜狂』古典文庫662、2002年

岩崎佳枝ほか校注『七十一番職人歌合・新撰狂歌集・古今夷曲集』(新日本古典文学大系61) 岩波書店、1993年

菅竹浦編纂『狂歌書目集成』臨川書店、1977年

○戯作

小池正胤ほか編『江戸の戯^{パロディ} 作絵本(一)～(四)、続刊一・二』現代教養文庫、1980～1985年

棚橋正博ほか注解『黄表紙 川柳 狂歌』(新編日本古典文学全集79)、小学館、1999年

森銑三『黄表紙解題』中央公論社、1972年

水野稔編『黄表紙集 一』 古典文庫264、1969年

○浮世絵

車浮代『Art of 蔦重：蔦屋重三郎仕事の軌跡』(笠間書院、2025年)

田辺昌子『もっと知りたい蔦屋重三郎:錦絵黄金期の立役者』(アート・ビギナーズ・コレクション) 東京美術、2024年

『日本古典文学大辞典』

変わりゆく江戸

—政治・経済・文化の交差点—

貨幣経済による変化

—農業から商業へ—

蔦屋重三郎が生きた 18 世紀後半の日本は、経済的に大きく発展した時代であった。江戸幕府は、農業中心の経済から商業中心の経済を推し進め、幕府の財政難を解決しようとした。そこで、老中の田沼意次（1719～1788）は、商人に株仲間を作ることをすすめ、特権を与える代わりに運上と呼ばれる営業税を徴収する政策を開始した。

これまでの日本の貨幣制度は、金貨・銀貨・銭貨がそれぞれ独立で相場が変動する「三貨制度」であった。江戸では、金貨は小判 1 枚を 1 両とする計数貨幣だったのに対し、大坂では、銀貨は重さで価値が決まる秤量貨幣、銅貨は 1 枚を 1 文銭とする表示貨幣であり、江戸の金遣・大坂の銀遣と呼ばれていた。そこで田沼は、国内での貨幣取引を円滑かつ、貨幣に安定的な価値を見出すために、初めて定量の計数銀貨を鑄造させ、金を中心とする貨幣制度への一本化を試みた。その例が、明和 9 年（1772）9 月から大量に鑄造された南鐐二朱銀で、金二朱として通用したものである。表面には「以南鐐八片換小判一両」、つまり「南鐐二朱銀 8 枚で小判 1 両に交換する」という意味の刻印がある。銀であるにも関わらず、金の単位である「朱」という表現を用いて、国内で取引が円滑に行えるようにした。

さらに田沼の時代は、経済発展を背景に学問や芸術が展開した。しかし、賄賂が横行し政治に対する批判が高まったことに加え、天明の飢饉（1780 年代）も起こり、全国で百姓一揆や打ちこわしが頻発した結果、田沼は老中を罷免された。

このように、蔦屋重三郎の生きた時代は貨幣経済が発展し、商品流通の拡大や都市が発達した。また、貨幣経済の推進や株仲間の形成により、商人や町人らが力を持つようになり、独自の文化を形成するようになっていった。

南鐐二朱銀

（東京国立博物館蔵）



（表面）



（裏面）

出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

田沼の命令により明和 9 年（安永元年）～天明 8 年（1772～88）の間、さらに寛政 12 年～文政 6 年（1800～23）の間に南鐐二朱銀が発行された（明和二朱銀・文政二朱銀）。南鐐とは純度が高いという意味で、良質な二朱銀であることから、「南鐐二朱銀」と呼ばれている。裏面には、分銅形と「銀座常是」の刻印がある。銀座常是とは、銀座役所の長である大黒常是（だいこくじょうぜ）を指す。

（担当：文学部史学科 4 回生 大久保優美）

自然災害と飢饉の衝撃

-天明の大飢饉-

天明の大飢饉（1782～1788年）は、享保・天保と並ぶ「江戸三大飢饉」のひとつに数えられ、その中でも最も深刻な被害をもたらした飢饉である。冷害や長雨に加えて火山噴火や疫病が重なった結果、全国で90万人以上が死亡したとされる。この飢饉は農村社会に壊滅的な打撃をあたえ、やがて都市部にまで影響を及ぼす大規模な社会危機となった。

まず、主な原因のひとつは度重なる悪天候による不作であった。天明2年（1782）以降、東北地方を中心に冷害が続き、天明3年には夏であっても冬のような寒さが続いた。そのため農作物は著しく育たず、日照不足や長雨が重なって収穫は大きく落ち込み、地域によってはまったく収穫が得られない村落も現れた。さらに天明3年（1783）には浅間山が大噴火を起こした。これにより群馬県嬭恋村鎌原地区では火砕流により152戸が消滅し、483人が死亡したと伝えられる。加えて、広範囲に火山灰が降り注いで農地を覆い、作物の生育を妨げた。こうして冷害と噴火による複合的な被害が重なり、東北から北関東を中心に飢餓が一気に拡大していった。

その結果、各地の藩政記録には深刻な被害が記録されている。弘前藩（津軽藩）では天明3年から4年にかけて藩人口の約3分の1にあたる8万人が死亡し、八戸藩では天明4年までに人口の半数にあたる3万人が死亡した。また仙台藩でも餓死者は14～15万人に達し、疫病による死者を含めると30万人が亡くなったとされる。その背景には、飢饉に備えて平時に蓄え、凶年に放出する救荒用の米である備荒米を江戸に輸送して販売する「廻米」が実施され、領内での米不足が一層深刻化したことがあった。

こうした食糧不足と米価の高騰は農村にとどまらず都市にも及び、各地で百姓一揆や米商人への打ちこわしが頻発した。江戸や大坂にも困窮した人々が流入し、米価の急騰に対して幕府は御救小屋や施米で救済を試みたが需要に追いつかず、暴動が続発した。この混乱は幕府の救済能力の限界を示し、やがて老中松平定信の施策へとつながった。天明の大飢饉は、冷害と噴火を契機に全国へ広がり、東北諸藩を中心に甚大な犠牲と都市社会の動揺をもたらした。

この図は、天明の大飢饉において牛の屍体を食べる人々を描いている。牛や馬は農耕や運搬に不可欠な家畜であり、当時の社会では通常食用にされることはなかった。そうした牛馬を口にせざるを得ない状況は、飢饉の深刻さを象徴している。

さらに当時の記録には人肉を食べる事例も伝わっている。杉田玄白が明暦～天明期の災害記録をまとめた『後見草』には、人肉を犬肉と偽って売る例が記されており、極限状態に追い込まれた人々の実態を伝える史料となっている。



「同（※奥州凶歳） 飢民牛馬を喰ふ図」

小田切春江編『凶荒図録』（愛知同好社、明治18年刊）より

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/838257>

（担当：文学部史学科4回生 足立優奈）

〔画詞〕
だいぎん 村郷ハ
大飢饉の村郷ハ
くもの るい
食物の類とてハ
ひしな つしうま
一品もなく牛馬の
にく さう
肉はいふも更なり
いぬねく くひく
犬猫までも喰ひし
たれどもつひにハ 命を
たも え がし
保ち得ずして餓死
あまた
せしも数多なりし

政治の揺らぎと改革の時代

—寛政の改革—

天明 3 年（1783）、全国的な凶作によって「天明の大飢饉」が発生し、多数の餓死者が出た。さらに米の買い占めによる米価の高騰が続き、町では打ちこわしが相次いだ。そこで、天明 7 年（1787）から寛政 5 年（1793）、老中の松平定信は「寛政の改革」を行った。

定信が行った改革の主な目的は、飢饉に備えた蓄えを作ることであった。農村には蔵を建てさせ、収穫量に応じた一定の割合の米や雑穀の備蓄を命じた。加えて、凶作の年には米を放出し、生活に困窮した人への貸付も行った。また、江戸の町人には、飢饉をしのげるように七分積金という積立金を蓄えさせた。

定信は経済政策だけでなく、町の治安対策にも力を入れた。当時の江戸の町には、仕事も住む場所もない地方からの出稼ぎ者が溢れていた。そこで、幕府は寛政 2 年（1790）旧里帰農令を出し、故郷へ帰って農業に従事することを促した。また、江戸の石川島（現在の東京都中央区佃）には、軽い罪を犯した者が社会復帰に向けて職業訓練をする場として人足寄場を設けた。

定信はこれらの政策で人々を救済する一方で、寛政元年（1789）には旗本・御家人に対して「贅沢禁止令」を発布する。旗本や御家人は札差（江戸時代の金融商人）からの借金で苦しんでいたため、「棄捐令」^{きえんれい}を発令して実質的に借金を帳消しにした。また、改革を進める中で、世の混乱は道德心の欠如にあるとし、君臣父子の上下関係を重視する「朱子学」を幕府の正学とし、寛政 2 年（1790）に「寛政異学の禁」を発令した。この学問統制は幕府の中だけのものであり、幕府公認の学問所である昌平坂学問所の講義のみを朱子学と定め、全国の各藩に強制したものではなかった。それでも幕府と同じように異学を禁じる藩もあった。

一方で、幕府の方針に逆らう者や朱子学自体に反対の者も多く居た。とりわけ強く反対して朱子学以外の学問を広めようとした、山本北山、冢田大峯、亀田鵬斎、市川鶴鳴、豊島豊州の 5 名の儒学者は「寛政の五鬼」と呼ばれている。

定信の厳しい政策は反感を買うことも多く、結局失脚へと追い込まれた。



『鸚鵡返文武二道』 恋川春町著・北尾政美画
寛政元年(1789) 蔦屋重三郎刊
(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)

幕府は、遊里などの風俗を題材にした洒落本や、政治風刺などを含む黄表紙といった出版ジャンルで、洒落本作者・山東京伝、黄表紙作者・恋川春町、出版元の蔦屋重三郎らに発行の禁止や財産没収の処罰をした。

春町作『鸚鵡返文武二道』^{おうむがえしぶんぶのふたみち}は、その前年に刊行された、寛政の改革を皮肉った『文武二道万石通』^{ぶんぶにとんまんごくどおし}（朋誠堂喜三二作）に呼応した作。文武二道を奨励した松平定信が、武士の教本として自ら編集した『鸚鵡之詞』を意識したタイトルで、平安時代を舞台にしながらも、時代錯誤の武士の美德を復活させた定信の愚かさを描くパロディだった。

(担当:文学部史学科4回生 稲葉沙紀)

町人文化の開花

-町人の感性が築いた、粋な時代の礎-

18 世紀後半、江戸を中心に文人や上層町人を担い手とする町人文化が開花した。江戸の経済発展と自由な風潮により、商人や職人などの町人の生活にも余裕が生まれ、文化や娯楽を楽しむ人々が増えていった。このような背景のもと、武士や公家などの一部の特権階級に限られていた学問や芸術は、次第に庶民の間にも広がっていった。

そのような変化をもたらした要因の一つとして寺子屋が挙げられる。寺子屋は都市や村々を問わず創られ、村役人や僧侶、神職、裕福な町人などが師匠となり、子どもたちに読み・書き・そろばんなどを教えた。また、女性の師匠も存在し、女性の心得を説いた『女大学』などを教材とし、女子教育も進められた。寺子屋の普及により庶民の識字率は上がり、多くの人々が本を読み、学問や芸術に親しむようになった。

江戸の町では貸本屋や絵草紙屋が軒を連ね、誰もが手軽に読み物に触れられる環境になっていた。なかでも「黄表紙」という絵入りの小説や、江戸の遊里を描いた「洒落本」など、社会・政治への風刺やユーモアを交えた作品は、風雅を求める庶民の感覚と合致し、人気を博した。これらの作品は、知識を得るためのものではなく、身近に楽しむことができる娯楽の一つとして広がっていった。

また、浮世絵もこの頃に大きな変化を遂げた。浮世絵は 17 世紀末に菱川師宣によって創始され、師宣は美人や役者に画題を求めて都市の風俗を描いた。特に、師宣が始めた版画は、印刷して大量に複製することができる為、比較的安価に入手することができ、庶民にも広く親しまれた。その後、18 世紀半ばには、鈴木春信によって多色刷浮世絵版画が生み出された。それらは錦のように美しいことから「錦絵」と呼ばれ、鈴木春信の『風流やつし七小町』などのほか、後には喜多川歌麿の『当時全盛美人揃』や東洲斎写楽の「役者絵」などの美しく鮮やかな作品が登場した。

このように、庶民の中で読書や芸術鑑賞が広がったことにより、文化の裾野は一気に広がった。そして、ただ受け手として楽しむだけでなく、自ら創作し表現する人々も現れ、文化はより一層多様で活気あるものになっていった。

こうした庶民間の文化の変化を読み取り、さらに大衆へと広めていったのが薦屋重三郎（以下「薦重」）である。薦重は寛延 3 年（1750）に江戸の新吉原に生まれ、20 代で吉原大門前に本屋「耕書堂」を開業した。そこで、吉原を訪れる人々の案内書となっていた吉原細見の刊行にも携わり、その序文を平賀源内や、当時人気のあった戯作者・太田南畝、山東京伝らに執筆させ、その価値を高めていった。また、恋川春町の黄表紙や山東京伝の洒落本、喜多川歌麿・東洲斎写楽の絵などを多数刊行した。薦重は単なる商人ではなく、時代の感性や流行を的確に捉え、当時の庶民に響く作品を次々と世に送り出し、後に世界中で広く愛される喜多川歌麿や東洲斎写楽といった浮世絵師たちを世に出した。薦重は大衆向けの出版物を積極的に手掛け、文化を「限られた人のもの」から「みんなのもの」へと変えていった。薦重の出版物を通して文化を広めるという姿勢は、のちに続く化政文化の基礎を築いた。

（担当：文学部史学科 4 回生 杉本萌奈）

「鎖国」と四つの口

— 交流が生んだ知の広がり —

江戸幕府の「鎖国」とは、海外との関係を完全に断ったのではなく、長崎・対馬・薩摩・松前の「四つの口」を通じて統制された交流であった。長崎ではオランダとの交易により蘭学が伝来した。顕微鏡や薬学書の導入が学問に新基盤を与える。中国からは絹や典籍がこれまで同様に入ってきて、儒学や漢詩が学ばれる素地となった。対馬は朝鮮との窓口であり、朝鮮通信使の来訪は外交儀礼を確立させ、朝鮮の書画や儒学の知識を日本にもたらした。薩摩の支配下に置かれた琉球王国は薩摩口を通じて中国と交流を続けた。この交流では、舞楽や冊封使由来の礼儀が日本文化に影響した。松前藩を拠点とする蝦夷地ではアイヌ交易が営まれた。そこでは、アイヌの工芸品や食文化が和人社会に伝わった。それは、ロシア接近による北方防衛の課題へとつながる。

このような国際交流を基盤として、安永から寛政年間にかけては、出版文化が都市を中心に発展した。書物は学問の伝達だけでなく、人々の生活や娯楽にも深く関わった。知識は書物を通して広がり、人々の知的世界を広げた。木版印刷を基盤とする出版によって、中国から流入した漢籍は再編され、日本独自の学問へと展開していった。和算や天文学、暦などの実用書も普及し、都市から地方へと知識を伝える役割を果たした。

一方で、黄表紙や洒落本、読本といった娯楽性の高い読み物類が流行した。こうした書物は、芝居や浮世絵と並び、町人文化を形成する。貸本屋の普及や本の流通経路の広がりによって、都市だけでなく農村や地方の武士層にも文化が伝わるようになった。教養と娯楽はこうして社会全体に共有される。

しかし出版の盛況は、幕府の厳しい統制を招いた。寛政の改革期には、黄表紙や洒落本などの娯乐的な読み物が禁じられた。出版は「風紀を乱すもの」と見られ、作家や版元にまで処罰が及んだ。それでもなお、文化が途絶えることはなく、新たな書物の出版は続いた。こうして安永から寛政にかけての出版文化は、国際交流を背景に知識と娯楽を支えた。その蓄積は幕末から明治の近代化を準備する知的基盤となった。



『解体新書』は、オランダの医学書『ターヘル・アナトミア』を翻訳し刊行された。当時の漢方中心の知識を覆し、科学的思考への転換を促した。幕府の出版統制や翻訳の困難を乗り越えて刊行され、蘭学ブームの礎となった。医学・科学の発展や教育の進展に大きな役割を果たした。

『解体新書』（四巻序図 1 巻）より

キュルムス著、前野良沢・杉田玄白翼訳 須原屋市兵衛、安永 3 年(1774)

(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2558887>)

(担当:文学部史学科4回生 極原加歩)

天明狂歌の展開

～より自由な文芸の流行～

狂歌とは、ひとことで言うならば和歌のパロディである。「五七五七七」という形式の中で、縁語や掛詞といった和歌の技法を過剰に使い、雅語（歌語）のみを用いるという和歌の決まりも取り払って、和歌とは正反対の卑俗な内容を詠むという、いわば形式とのギャップを楽しむ遊びである。

こうした遊びは古くからあったが、江戸において、和歌を学ぶ武士たちの中から明和の中頃に生まれたのが、従来の狂歌とはタイプの違う「天明狂歌」であった。鋭い機智と軽快な笑いを基調とするもので、同時代の知識層の漢詩文による弄文趣味、特に狂詩（漢詩のパロディ）の流行が和学の世界を刺激したとも言われている。狂詩も狂歌も、培った教養（漢詩・和歌）を滑稽なものに振り向けて戯れるという点で共通している。

天明狂歌の具体的な例をみよう。例えば**四方赤良**の狂歌（※別掲の「四方赤良」紹介を参照）

「あなうなぎ／いづくの山の／いもとせと／さかれて後に／身をこがすとは」

これは「あるはずのないことが起こる」という意味の「山の芋が化して鰻となる」ということわざを生かしながら、「あな憂（ああ、悲しいことよ）」と「あな（感動詞：ああ）＋鰻」、あるいは「山の芋」と「妹と背（夫婦の意）」と掛詞を多用して、夫婦仲を裂かれて身を焦がされても焦がれる恋情を歌っている。

また、狂歌は自由度が高く、有名な古典文学作品の要素を多く含んだものなども存在する。同じく**四方赤良**が詠んだ、

「おれをみて／又うたをよみ／ちらすかと／梅の思はん／事もはづかし」

という歌があるが、これは『源氏物語』に出てくる長命を恥じる一節「松の思はむことだにはづかしう」をふまえて、歌（狂歌）を詠み散らかしている自分を「恥すかし」と言う。

このように、ことわざや有名古典作品のパロディ、時事ネタ、笑いなどを巧みに表現しているのが狂歌の面白い部分である。

なお、**薦屋重三郎**も「**薦唐丸**」という狂名（※狂歌を詠む時の別名）を用いて活躍し、歌会を開いて狂歌師のためのサロンを設けたりしている。四方赤良のほか、**朱楽管江**^{あけらかんこう}、**宿屋飯盛**^{やどやめしもり}らとも親交があり、彼らの協力のもとで狂歌本の名作を次々と出版したりと、江戸時代の狂歌ブームを後押しした。

狂歌は急速な流行に伴い低俗化が進行し、松平定信の新政以降の影響もあって、より高尚で教養的な方向への軌道修正が求められるようになったとされる。しかし、その一方で狂歌の流行はそれとは無関係に大衆層に広がり、幕末から明治にまで至ったのである。

〔参考文献〕 小林ふみ子「大田南畝晩年の狂歌」（『日本文学誌要』86、法政大学国文学会 2012年）

名古屋刀剣博物館 「薦屋重三郎」の出版基礎知識（<https://www.meihaku.jp/berabou/>）

「狂歌本・狂歌とは」「薦屋重三郎と大田南畝の作品」（2025年9月12日閲覧）

（担当：文学部史学科4回生 世良紗也果）

天明狂歌

～狂歌師たちの登場と活動～

江戸狂歌は明和期(1764—1772)に始まり、天明朝(1781—1789)に頂点を迎えた。明和6年(1769)に唐衣橘洲^{からころもきっしゅう}の宅で開かれた最初の狂歌会を切掛けに、江戸狂歌は発生したとするのが通説である。古典和歌から踏みはずさず温雅なユーモアを理想とした、唐衣橘洲。和歌にとらわれず大胆で滑稽に詠う、四方赤良^{よものあから}(太田南畝)。和歌に親しみながら赤良と協調した、朱良菅江^{あけら かんこう}。他にも平秩東作^{へづつとうさく}や木網夫妻^{もくあみ}等の狂歌師が登場していく。

江戸狂歌発生期の頃の狂歌に対する認識として以下のようなものがある。文化10年(1813)刊『弄花集』^{ろうがしゅう}の橘洲による序文(「寛政九年仲夏」付)に、赤良の発言として次のように記している。「おほよそ狂歌は時の興によりてこそ詠むなるを、ことがまっしく集会^{つどひ}をなして詠む痴者^{しれもの}こそ烏滸^{をこ}なれ。」この文から、狂歌は詠み捨てという認識があったことが窺える。

四方赤良の随筆『奴師劣之(奴風)』^{やつこだこ}(文政4年(1821))によれば、歳旦(元旦)に狂歌の摺物を始めたのは大根太木という人物で、安永期(1772—1781)後半頃からという。一方、摺物よりも手間のかかる刊行書物としての狂歌集は、現在のところ天明元年(1782)に計画され翌年に刊行された、浜辺黒人の『初笑不琢玉』^{はつわらいみがかぬたま}が最も早いとされている。

天明3年(1783)正月、橘洲は狂歌集である『狂歌若葉集』^{きょうがわかばしゅう}を出版し、赤良は『千載和歌集』に題名を寄せた狂歌集『万載狂歌集』^{まんざいきょうかしゅう}を出版する。その中でも赤良の『万載狂歌集』を中心として江戸で狂歌ブームが起こり、新鮮な気魄と歯切れのいいユーモアを基調とする赤良の作風が主流となり、一連の天明年間に流行した狂歌を天明狂歌と呼ぶ。狂歌の世界は、貴賤上下、戯作者や役者など幅広い層の人々を取り込んで、四方赤良を中心として大きく輪を広げていく。

天明7年(1787)、松平定信が老中となり、質素儉約や風紀の引き締めを目的とした寛政の改革が始まった。狂歌師のうち、赤良や恋川春町といった武士階級の人々は筆を置くことになり、江戸狂歌の黄金期は終わる。

武士と町人が共有していた天明狂歌壇から赤良たちが抜けたあとも、橘洲や菅江等の一部の武士は残った。だが以前のように活動ができず、町人たちに狂歌壇の主導権は移行した。狂歌四天王と呼ばれる町人狂歌師が登場し、寛政・享和期(1789—1804)へ江戸狂歌は続いていく。

〔参考文献〕 鈴木俊幸『薦屋重三郎』平凡社新書 2024 年

矢野寛一、長友千代治『日本文学説林』和泉書院 1986 年

新日本古典文学大系『寝惚先生文集・狂歌才蔵集・四方のあか』岩波書店 1993 年

(担当:文学部史学科4回生 橘 里穂)

天明狂歌を盛り上げた人々 1



宿屋飯盛編『吾妻曲狂歌文庫』より
「四方赤良
あな／うなき／いつくの／山のいもと／
せと／さかれて後に／身をこかす／とハ」

よものあから
四方赤良 寛延2年(1749)～文政6年(1823)

大田南畝、蜀山人としても知られる。15歳の頃に和学者・内山賀邸に入門。同門には唐衣橘洲や朱楽菅江らがいた。唐衣らと狂歌会を開くことで本格的に狂歌に熱中していく。ほかにも戯作や洒落本、黄表紙などにも着手し、多くの文学活動に勤しんでいた。薦屋重三郎とも交流があり、狂歌関連の本を薦屋が刊行することもあった。四方が結成した狂歌の集団は四方側と呼ばれ、狂歌世界の中心的存在だった。

田沼意次政権崩壊後は、狂歌から離れて幕府の役人としての仕事を中心となるも、出役先の大坂銅座では「蜀山人」を号として再び狂歌に触れていくこととなる。



宿屋飯盛編『吾妻曲狂歌文庫』より
「唐衣橘洲
世にたつハ／くるし／かり／けり／
腰屏風まがり／なりにハ折かゞめども」

からごろもきっしゅう
唐衣橘洲 寛保3年(1743)～享和2年(1802)

田安家の家臣小島源之助の狂名。四方とは内山賀邸の同門。上品で形の整っている作風を好み、ユーモアに溢れ笑いを誘う作風である四方とは相成れず、のちに対立していくこととなる。また狂歌本にも着手していたが、同時期に出された四方・朱楽らの狂歌本のほうが人気を博したことにより、一時期狂歌の世界から離れていた。しかし、田沼失脚後に台頭した松平定信の政権の世では、唐衣の狂歌の在り方が重きを置かれたことにより、狂歌の世界へと戻って来る。その後、薦屋が『狂歌初心抄』を寛政2年(1790)に出版し、唐衣はここで天明調について批判的な事柄を記している。

唐衣橘洲が結成した狂歌の集団は酔竹側、四谷連などと呼ばれていた。

〔画像出典〕『吾妻曲狂歌文庫』国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/14122014/1/7> (上)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/14122014/1/31> (下)

〔主な参考文献〕『日本古典文学大辞典』(岩波書店)、菅竹浦著『近世狂歌史』(日新書院、1940年)、

日本古典文学全集『黄表紙；川柳；狂歌』(小学館)、

鈴木俊幸監修『別冊太陽 日本のこころ319 薦屋重三郎一時代を変えた江戸の本屋一』(平凡社、2024年)

(担当:文学部史学科4回生 土子琴弓)

天明狂歌を盛り上げた人々 2



宿屋飯盛編『吾妻曲狂歌文庫』より

「宿屋飯盛

などてかく／わかれの／足のおもたきや
／昔ハ／自由にふりかへれとも」

やどやめしもの

宿屋飯盛

宝暦3年(1753)～文政13年(1830)

石川^{まさもち}雅望、旅籠屋を営む浮世絵師の石川豊信の子。天明3年(1783)に四方赤良の門に入る。狂歌師としても活躍しながら、国学者、絵本作者としても知られている。歌風は典型的な天明調のもので、機知に溢れ、古今の故事、古典文学に素材を求め、言動が軽やかで、洒落気があるものとされる。狂歌師としての彼の地位を不動なものとしたのは、篇重の肝入りで、北尾政演^{きた おまさのぶ}（山東京伝^{さんとうきやうでん}）とコンビで^{あすまふり}『吾妻曲狂歌文庫』（画像・別掲注参照）、喜多川歌麿^{きたがわうたまる}と組んだ『絵本詞の花』などといった一連の狂歌絵本を刊行したことである。寛政3年(1791)には家業のことで冤罪を蒙って一時期は狂歌界から遠ざかり、寛政年間以降は国学方面でも名を成した。



宿屋飯盛編『吾妻曲狂歌文庫』より

「朱楽菅江

紅葉ハ／干しほ／百しほ／しほしみて
／から錦とや／人のみるらん」

あけらかんこう

朱楽菅江

元文3年(1738)～寛政10(1798)

幕臣の山崎景貫の狂名。大田南畝^{おおた なんぽ}（四方赤良^{よものあから}）、唐衣橋洲^{からごろもきしゅう}らに誘われて安永始め頃狂歌を始め、やがて妻（狂名^{ふしまつのかか}「節松嫁々」）と共に門下を指導して「朱楽連^{あけられん}」と称した。

歌風は、「の」の字体に特徴があり、「丸ののや」などと呼ばれた。作風は、自由軽快さ、和歌に近い調和のようなものではなく、これらの要素の中間的立ち位置をとったものであった。

四方赤良^{よものあから}と共撰の^{まんざいきやうかしゅう}『万載狂歌集』が天明3年(1783)に出て大成功を収め、狂歌が爆発的な流行を迎えた。菅江は、南畝とともにこの後「狂歌界の巨頭」として狂歌に関わっていった。

※天明6年(1786)に刊行された『天明新鑑五十人一首 吾妻曲狂歌文庫』は、宿屋飯盛編・北尾政演（山東京伝）画の狂歌絵本。当時の著名な狂歌人50名の肖像と狂歌を収めている。

掲載画像はすべて国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/pid/14122014>）より

（担当：文学部史学科4回生 住吉美咲）

戯作の盟友たち

戯作の魅力

江戸の庶民が愛した文学を読み解く

戯作とは江戸時代後期に江戸で出版された様々なジャンルの小説を総称した文学作品のことを指す。現在で例えると漫画やライトノベルのような存在である。身近な日常や人間関係を描き、多くの人の心をつかんだ。戯作には江戸時代の人々の価値観が色濃く反映されている。また、印刷技術の発展により大量の本が作られ、貸本屋などを通じて広く読まれるようになった。

戯作はいくつかのジャンルに分かれている。黄表紙は18世紀後半に流行した庶民向けの絵入り読本である。対象読者は若者から庶民の大人向けその中でも特に町人をターゲットにしていた。表紙が黄色い厚紙でできていたため「黄表紙」と呼ばれるようになり、代表的な作品は恋川春町の『金々先生栄花夢』や山東京伝の『江戸生艶気樺焼』がある。蔦屋重三郎（以下蔦重）は黄表紙を大ヒットさせた立役者の一人である。本の装丁・挿絵の美しさにこだわり喜多川歌麿などの一流の人物を抱え、元々は子ども向けであった赤本に風刺や色気を加え需要を拡大させた。

洒落本は同時期に流行した大人向けの風俗文学である。遊里（吉原などの遊郭）を舞台とし、恋愛や駆け引きなどを描いた作品。対象読者は教養のある町人や武士で、主に男性が中心になっていた。代表的な作品は山東京伝の『仕掛文庫』などがある。蔦重は遊里文化を文学の対象とし、知的で粋なジャンルとして売り出していた。黄表紙と同様に本のデザイン性を高め書物を見て楽しめる商品として進化させた。しかし、寛政の改革で風紀を乱すとしてきびしく取り締められ手鎖50日の刑に処された。そのため、黄表紙と洒落本が衰退していき、より無難な題材の戯作へと変化していく。

滑稽本は改革後に成立した庶民の日常生活を面白おかしく描いたものである。登場人物のとぼけたやり取りや失敗談を会話中心とした文体で描いている。登場人物は普通の町人である。対象読者は町人で男性だけでなく女性にも人気であった。代表的な作品は式亭三馬の『浮世風呂』などがある。蔦重自身が滑稽本を多く出版しているわけではないが、出版戦略や黄表紙と洒落本の影響が滑稽本に受け継がれている。



(担当:文学部史学科4回生 稗田芽依)

(※パネルのセクションタイトルデザイン担当)

薦重と戯作の原点

春町と喜三二

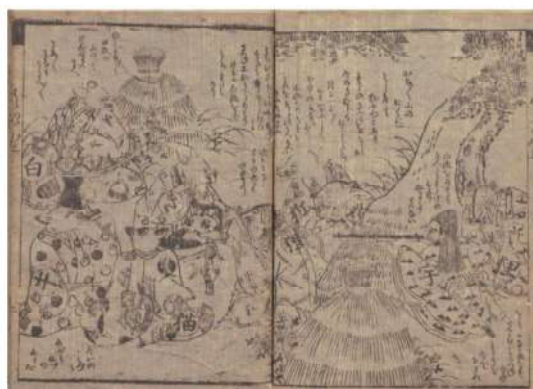
恋川春町^{こいかわはるまち}と朋誠堂喜三二^{ほうせいどうきさんじ}は、薦屋重三郎^{つたやじゅうざぶろう}(以下、薦重)が出版界で頭角を現す前から、すでに洒落本や黄表紙の世界で名を知られた戯作者であった。駿河小島藩の江戸留守役である春町が書いた『金々先生栄花夢』^{きんきんせんせいえいがのゆめ}は、黄表紙という新ジャンルの先駆けとなった作品であり、従来の黒本や青本とは異なり、中国や日本の古典を下敷きに、難解な語彙を含んだ知的で風刺の効いた“大人の読み物”として楽しめるようになった。



恋川春町『金々先生栄花夢』鱗形屋孫兵衛

(国立国会図書館デジタルコレクション)

<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000>



朋誠堂喜三二『親敵討や腹鼓：2巻』薦屋重三郎、寛政6年(1794)

(国立国会図書館デジタルコレクション)

<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R1000000002-1000003280482>

秋田佐竹藩の留守居役である平沢常富^{ひらさわつねとみ}は、朋誠堂喜三二という戯名を名乗り、安永6年(1777)正月に『親敵討腹鼓』^{おやのりかたきうてやばらつみ}や『桃太郎後日漸』^{ももたろうごにちばなし}など7作の黄表紙を発表し、恋川春町の『金々先生栄花夢』から始まった戯作ブームにいち早く乗った。うち6作の挿絵と滑稽本『古朽木』^{ふるくちき}でも春町が序文と挿絵を担当し、プライベートでも春町の再婚を喜三二が世話するなど、二人の関係は公私ともに親密であった。

そんな二人が目かけたのが、薦谷重三郎であった。当時の薦重は、まだ吉原を中心とした貸本屋であったが、出版資源に限られた中で戯作分野に進出する背景には、朋誠堂喜三二の協力があつた。安永6年(1777)3月、薦重が刊行した華道書『手毎の清水』^{てごとしみず}は、喜三二が序文を寄せたものであり、その内容は喜三二が安永3年(1774)に出版していた『一目千本』^{ひとめせんぽん}の版木を改変・再活用して制作されたとされる。これは、まだ版木も限られていた薦重にとって効率的な出版方法であり、喜三二のあらゆる面で支援を惜しまなかったことがわかる。さらにこの華道書の編者・清水景澄も、喜三二の創作上の人物とも考えられており、薦重の出版物の中心に、すでに喜三二という戯作者が深く関わっていたことがうかがえる。また、恋川春町の『金々先生栄花夢』は、当初は鱗形屋孫兵衛から出版されたが、寛政6年(1794)の三版以降は薦重の手によって刊行されるようになり、代表作をあえて薦重版として出した点からも、二人の継続的な関係がわかる。

つまり、薦重がのちに多くのヒット作を生み出していく出発点には、すでに人気と実力を持っていた春町と喜三二という戯作者との強いつながりがあつたことになる。彼らとのやりとりの中で、吉原の小さな本屋だった薦重は、江戸の出版界でも存在感を放つようになっていく。山東京伝や十返舎一九を手がける以前に、春町と喜三二という先輩たちと手を組んだこの時期が、薦重にとっての“戯作の原点”であった。

(担当:文学部史学科4回生 濱本胡花)

規制された戯作

しゃれぼん つたじゅう きょうてん
洒落本規制の処罰を受けた篇重と京伝

洒落本とは？

遊郭での遊びを取材した戯作で、遊びの心得や遊郭での客と遊女のあそび、やりとりを描写するなどさまざまな形式がある。つまり、洒落本は好色本と言っても良い部分がある。

そのような部分から、寛政の改革下の江戸では、洒落本の取り締まりが行われた。

享保7年(1722)の町触では、好色本の禁止が明示された。

寛政2年(1790)の町触では、洒落本を出版する前の検閲が義務化された。

さんとうきょうてん きた おまさのぶ
山東京伝(北尾政演)

宝暦11年(1761)生まれの町人 本名：岩瀬 醒 いわせさむる

浮世絵、戯作、考証随筆など幅広い分野で活躍した人物。

若くから遊里に通い、1人目の妻の死後、2人目の妻を迎える。妻は2人とも遊女であった。

つた やじゅうざぶろう
山東京伝と篇屋重三郎

山東京伝(以下京伝)が発表した洒落本17作のうち11作が篇屋重三郎(以下篇重)による出版であり、篇重は京伝の黄表紙や滑稽見立て絵本も出版していた。

つまり、戯作者としての京伝は、篇重との関係を抜きにしては考えられない。

洒落本の取り締まりが行われる中で、京伝の新作は評価され、版元は利益を受けた。

しかし、その後町奉行による取り調べがあり、洒落本を作成した京伝は手鎖50日、版元の篇重は財産を半分没収という処罰を受けた。

しかけぶんこ
『仕懸文庫』

京伝の洒落本『仕懸文庫』 しょうぎぎぬふるい 『娼妓絹籠』 にしきのうら 『錦之裏』は、寛政3年(1791)に篇重から出版され、取り締まりにより絶版となった。そのうち今回は、『仕懸文庫』を取り上げる。

右の画像は、『仕懸文庫』の口絵と本文の冒頭である。

内容：歌舞伎などで知られた曾我物の登場人物である小林 こばやし

あさひな そがのじゅうろう そがのころろ
朝比奈、曾我十郎、曾我五郎らが太閤の廓で遊ぶと

いうものだが、実際には江戸の深川の遊里を太閤に
仮託して描写した作品。

対策：洒落本を出版するために義務付けられた検閲を通過するために、書籍の本体を包む袋に「教訓読本」と書き、教訓を前面に出すことで、役に立つ本であることを強調した。



山東京伝『仕懸文庫』篇唐丸、寛政3年(1791)

(国立国会図書館デジタルコレクション) <https://dl.ndl.go.jp/pid/2533925>

(担当：文学部史学科4回生 蜂谷彩水)

薦重と笑いを生み出す戯作者

じっぺんしゃいっく 十返舎一九

じっぺんしゃいっく
十返舎一九（以下、一九）、^{しげたさだかず}重田貞一。現在の静岡市である駿河国府中で、下級武士の息子として生まれる。22歳の時、江戸のある「^{こうかん}侯館」（大名の江戸藩邸）に仕える。その後、大坂で浄瑠璃作者になるが、29歳の時、江戸に戻って板元である^{はんもと}薦屋重三郎（以下、薦重）のもとで居候になる。文才に加え絵心があったため、文章から挿絵まで自身で描く作者として、薦重の手伝いの傍らで、翌年寛政7年（1795）に黄表紙作者としてデビューを果たす。数え年31という遅いスタートとなる。

黄表紙のブームが終わる文化3年（1806）までの僅か11年の間に、約200点もの黄表紙を残しており、その中で化物を扱う作品が多くある。デビュー2年目となる寛政8年に早くも化物草紙といえる作品を発表し、次の年から定期的に化物草紙を描き続けた。



一九 画作『怪談筆始 2巻』, [薦屋重三郎], [寛政8 (1796)].
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/10301800> (参照 2025-08-24)



[十返舎一九 著] ほか『東道中膝栗毛』後, 小林鉄次郎, 明14.3. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/879122> (参照 2025-09-11)



十返舎一九 作・画『文字の知画』, 文化4 [1807] 序. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2533807> (参照 2025-08-24)

享和2年（1802）、『^{とうかいどうちゅうひさくりげ}東道中膝栗毛』を出版して当初から人気を博す。一九自身は文政5年（1822）まで続編を書き続け、映画化や漫画化、学校の教科書に載るなど、200余年経った現代まで老若男女に知られている作品となっている。

彼の作品には、言葉遊びで読者を楽しませる、笑わせる、といった共通点があった。黄表紙に対しての規制が厳しくなっても、読者へ提供する楽しさが彼の作品の中で生き続けているのではないだろうか。

また、広く知られた“へのへのもへじ”のような文字遊びを彼もしており、『^{もんじ}文字の知画』という滑稽本を出版している。本書の口上（『文字の知画』序）に「文字を作るといのは、特別な使い道があるのではなく、寺子屋の子供たちに喜ばれ、大人になるにつれて忘れ去られてしまうものだ」という意のことを述べている。

（担当：文学部史学科4回生 中村愛真）

葛屋重三郎と歩む浮世絵師の軌道

浮世絵とは

江戸時代に庶民の間で広まった風俗画の一種で、特に版画として発展した。風俗画は遊楽図、祭礼図、都市図などがあり、人々の暮らしや流行を生き生きと描き出した。もとは屏風や絵巻に描かれていたが、やがて人物や風景を独立させて、肉筆画や版木の「浮世絵」として親しまれるようになった。版木を用いることで大量に印刷でき、安価に広まり、美人画・役者絵・風景画など多彩なジャンルが庶民の娯楽として楽しまれた。

浮世絵の流れの中で見る葛屋重三郎と葛飾北斎

この浮世絵を大きく発展させた人物の一人が、出版人・葛屋重三郎である。彼は日本橋に店を構え、戯作本や浮世絵版画を次々に出版した。葛重は単に売れそうな作品を世に出したわけではなく、無名の才能を見抜き、積極的に売り出すという文化的プロデューサーの役割を果たした。代表的な例が喜多川歌麿の美人画であり、彼の作品を通して女性の姿を華やかに表現する新しい美の基準を社会に広めた。また、謎に包まれた絵師・東洲斎写楽の役者絵も葛重の仕掛けによるもので、江戸の浮世絵界に強烈なインパクトを与えた。さらに、戯作者・曲亭馬琴の才能を見出して支援するなど、絵師や作家を育て、江戸文化を牽引した存在であった。

こうした葛重の活動は、のちに葛飾北斎(1760 - 1849)の登場へと繋がっていく。北斎は若い頃に葛重のもとで黄表紙や版木の挿絵を描く機会を得た。葛重自身が早世したため、直接の関わりは長く続かなかったが、彼が築いた出版ネットワークや、無名の絵師を世に出す仕組みは、北斎の世代に受け継がれていた。その後、二代目葛重が出版を支え、北斎を含む次世代の浮世絵師たちが活動の場を得ることになる。葛飾北斎は、役者絵や美人画から出発し、やがて「富嶽三十六景」に代表される風景画によって浮世絵を国際的な芸術へと高めた。これは、葛重が広めた浮世絵人気という基盤があったからこそ実現したものと言える。すなわち、才能発掘に秀でた葛重がまいた種は、北斎の世代で大きく花開いたのである。



葛飾北斎 「麦葉縫工の見世物」
大判 錦絵 (4枚続の1枚)
文政3年(1820)
東京国立博物館蔵、出典：ColBase



このように浮世絵の流れを俯瞰すると、葛重と北斎の関係は、単なる出版人と絵師のつながりにとどまらず、文化を仕掛ける者と、それを芸術として結実させた者との継承の物語として理解できる。浮世絵の歴史を語る上で、両者の存在は切り離すことが出来ない重要な位置を占めているのである。

葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」横大判 錦絵
東京国立博物館蔵 出典：ColBase

(担当：文学部史学科4回生 吉崎伶奈)

きた おしげまさ まさよし 薦屋重三郎を支えた北尾重政、政美の浮世絵

北尾重政は、江戸時代中後期の浮世絵師である。錦絵の創始期にあたる宝暦末頃(1751年～1764年)から文政期(1818年～1830年)前半に活躍した。特定の師につくことなく、独学で絵を学んだ。その後、北尾派の開祖となり、北尾政演(後の山東京伝)、北尾政美などの門人を有した。

重政は、錦絵や絵本の作品も知られるほか、特に安永・天明期に手がけた狂歌絵本が、よく知られている。仕事の中心にあったのは、版本の挿絵であった。また、絵本だけでなく、黄表紙や読本などの挿絵も描いた。さらに、この時期には美人絵師としての、人気があった。役者絵や、美人画、浮絵、武者絵など、様々な作品を残した。



(写真1) 北尾重政・勝川春章『青楼美人合姿鏡』より
(東京国立博物館提供画像 C0090798)

重政は、16歳から文字を書く仕事をしていた。絵の仕事を確認できるのは、明和2年(1765)に出版された小謡本『栄花小謡千年緑』の挿絵である。そこには「北尾重政写」の署名が確認でき、この頃には画工として活動していたと考えられる。同年、重政は役者絵も描き、出版もされている。

北尾重政と薦重の交流は、古くから続いていた。薦重の初期の出版物である、安永3年(1774)刊『一目千本』の挿絵は、重政が描いたものである。この挿絵で画工をつとめて以降、薦重の出版物では、重政が起用されることが多かった。

重政は、薦重が出版した遊女図集にも関わっていた。特に、安永5年(1776)に刊行された『青楼美人合姿鏡』(写真1)は有名である。これは、勝川春章とともに遊

女図を描いた。遊女たちが、本を読んでいる様子や、投扇興で遊んでいる様子などが描かれている。また、狂歌絵本でも絵を描いている。その一つにあげられるのは、天明6年(1786)に刊行された『絵本吾妻挾』である。この本は、薦重が、江戸の名所を描いた絵と狂歌とを組み合わせる工夫を凝らして、企画されたとされる。

重政の弟子であった北尾政美は、黄表紙などの挿絵画工として画業を始める。安永7年(1778)に15歳で黄表紙仕立ての咄本『小鍋立』の挿絵を描き、その後、黄表紙類の画工として活躍するようになる。薦重が刊行した黄表紙、狂歌集でも画工として起用された。

寛政6年(1794)には、美作国津山藩(現：岡山県)の御用絵師に任用される。藩命で幕府奥絵師の狩野惟信に師事することとなり、画名も鋏形くわがにけい蕙斎いさいつくさね紹真と称した。その後、作風を大きく変化させていく。浮世絵では、肉筆画に力を注いだ。また、絵画教習に資する図典風の版本(『諸職画鏡』など)を多く手がけたことでも知られている。



(写真2) 北尾政美「浮絵仮名手本忠臣蔵 十段目」
(東京国立博物館提供画像 C0012617)

(担当:文学部史学科4回生 横山星羅)

薦屋重三郎と喜多川歌麿が 織りなす浮世絵の世界

薦屋重三郎の新たな挑戦

薦屋重三郎が喜多川歌麿を初めて絵師として起用したのは、安永10年(1781)正月に刊行した滑稽本『身貌大通神 畧 縁起』の挿絵であった。この出会いをきっかけに、薦重は歌麿の才能を見出すこととなる。天明3年(1783)、薦重は毎年8月に吉原遊廓で開催される吉原 俄^{にわか}を題材とした錦絵を企画するが、その際、絵師として歌麿を抜擢した。これは、すでに大手版元・西村屋与八が人気絵師の鳥居清長と組んで吉原俄の錦絵を刊行していたことに対抗するためだった。薦重は清長に対抗できる絵師として歌麿の才能を信じ、歌麿もその期待に応える力作を生み出した。薦重の店に歌麿を仮住まいさせていた時期もあったと伝わっており、両者の間に強い信頼関係が築かれていたことがうかがえる。

美人画の才能の片鱗を見せた歌麿であったが、この頃の薦重が特に力を入れていたのは狂歌関係の出版物であった。歌麿が制作する一枚摺の錦絵には、狂歌の贅を伴う作例がしばしば見られる。特に注目すべきは狂歌絵本である。薦重は天明6年(1786)より、版元主導による狂歌絵本を立て続けに刊行したが、その挿絵のほとんどを歌麿が一手に引き受けている。しかも、求められたのは浮世絵らしい当世風俗の人物だけでなく、リアルなタッチによる昆虫や鳥、草花なども含まれていた。狂歌師たちが満足するような優美な世界を生み出すため、幅広い画技を持つ歌麿は、薦重にとって貴重な存在であった。この時点で歌麿は、薦重の出版業を支える大事な屋台骨となっていたのである。

さて、寛政3年(1791)、洒落本制作の罪で身上半減という厳しい処罰が薦重に降りかかる。寛政の改革で狂歌絵本も先細る中、薦重が次の一手として考えたのが、歌麿による美人画の錦絵であった。長年タッグを組んできた歌麿の才能に改めて賭けてみようと考えたのだ。寛政4~5年(1792~93)頃、「婦人相学十鉢(婦女人相十品)」という女性の上半身をクローズアップした大首絵を刊行した。しかも背景には豪華な雲母摺が施されていた。

「婦女人相十品・ポッピンを吹く娘」
大判錦絵寛政4年(1792)頃



大首絵という描き方自体は、すでに勝川春好や勝川春英が役者絵で行っていたものである。しかし、これまでの美人画は、鳥居清長の作品のように、すらりとした全体像を捉え、顔は小さく描くのが一般的であった。美人画の常識を外れる大首絵というアイデアは、歌麿から出たものであろう。だが、前例がない美人画を刊行することに加え、幕府の出版統制で贅沢な摺りが咎められる危険がある中、きらびやかな雲母摺を用いるという決断は、薦重が歌麿の才能を深く信じていなければ実行できないものであったに違いない。

歌麿の美人画は評判となり、薦重はその後も斬新な作品をいくつも刊行していくことになる。例えば「歌撰恋之部」の紅雲母摺や、「霞織娘雛形」の透き通った織物の描写のように、手間のかかる彫りや摺りを要するものが多く、歌麿のアイデアに薦重の判断も少なからず関わっていたと推測される。その一方、寛政5年(1793)頃から歌麿の元には薦重以外の版元からの依頼がどんどん寄せられるようになっていく。寛政6年(1794)には薦重が東洲斎写楽の役者絵に力を入れたこともあってか、二人の密接なつながりは徐々に薄まっていった。

画像出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム(ColBase)

(担当:文学部史学科4回生 藤田麻希)

とうしゅうさいしゃらく 蔦屋重三郎と東洲齋写楽

—浮世絵界の革新者—

寛政5年(1793)、江戸の歌舞伎の人気は低迷していた。天明の飢饉や寛政の改革の影響もあり、中村座・市村座・森田座の「江戸三座」の経営が悪化。三座が興行権を都座・桐座・河原崎座といったひかえやぐら控櫓(※江戸三座が興行できなくなった場合に、代わりに興行が許可された劇場)に譲るという事態にまで陥った。それに伴い、役者絵の刊行も低迷する。しかし、蔦屋重三郎はこれを好機と捉えた。

蔦重はもとは勝川春英や勝川春朗(葛飾北斎)の細判役者絵を刊行していたが、これを機に、従来とは異なる役者絵を刊行することを決意する。そして、抜擢されたのが、絵師として実績がない東洲齋写楽だった。

浮世絵師は、通常、版本の挿絵や小さな判型の錦絵から活動を始め、次第に大判と呼ばれる大きなサイズの錦絵を手がけるのが一般的だった。喜多川歌麿のように長年信頼関係を築いた絵師であればともかく、絵師を本業としない無名の存在であった写楽の大判の錦絵を28点も刊行。当時の浮世絵界においてまさに異例中の異例であった。

蔦重は積極的に写楽を売り出し、その結果、写楽の存在は広く知られることとなる。

寛政7年(1795)正月の刊行以降、写楽は突如として姿を消し、その2年後の寛政9年(1797)に蔦重はこの世を去る。写楽は、わずか10ヶ月の間に、役者絵以外にも含め140点あまりもの錦絵を残した。写楽と蔦重が浮世絵界に与えた影響は大きく、後の役者絵の隆盛へと繋がる。



さんせいせがわきくのじょう 田辺文蔵のつま
「三世瀬川菊之丞の田辺文蔵妻おしづ」

大判 黒雲母摺

この絵は寛政六年五月、都座の「花菖蒲文禄曾我」に出場する三世瀬川菊之丞の田辺文蔵の妻おしづの役であるが、田辺文蔵は石井兄弟の仇討を助け暮しの困窮にたえる役であるが、その妻おしづも夫とともに苦難に沈む役で、病身であるために鉢巻をしている。

この絵は写楽の女方を描いた図の内では一、二を争う名作といえる。



おおたにとくじ やくこそですけ
「大谷徳次の奴袖助」

大判 黒雲母摺

寛政六年五月都座の「花菖蒲文禄曾我」に出る仇討をする方の奴の袖助を描いた作で、大谷徳次は当時の道化役の一人者であった。その滑稽味が、下った眉、つぶらな眼に、よく現れている。写楽が役者、役柄を表現した佳作の一つである。

この絵で、写楽は人物を思いきって右へよせ、右側をひろく空間にするという構図法をとって成功している。

画像・解説引用：監修解説吉田暎二・編集発行瀬戸不二夫『東洲齋寫楽』（悠々洞、昭和43年）

（担当：文学部史学科4回生 船越沙也加）

吉原と蔦重

蔦屋重三郎の生まれ育った吉原

一江戸吉原遊郭 文化・生活一

吉原は幕府公認の下で運営された唯一の大歓楽街である。「吉原」は元々日本橋に所在していたが、明暦3年（1657）、奥浅草（千束町）へと移動したことで「新吉原」と呼ばれるようになった。

吉原で働く遊女は、困窮家庭から買い取られた女性たちが女衞という仲介人によって妓楼に転売されていた。このとき、見目よく才のある幼女は花魁（高級遊女）候補として高等教育を受けることになる。出世すれば個人的な部屋と座敷を持つことができ、専属の禿（7～14歳ほど、客を取らない遊女見習い）の世話係となった。さらに、花魁は客をある程度選ぶこともできた。その他の遊女は、張見世と呼ばれるショーケースのような場所で客を取った。さらに階級の低い遊女になると時間制で客を取る場合もあった。

どのような階級であれ、遊女には等しく売りものとしての年季が存在する。27歳が原則とされるが、年季よりも早く死亡する場合が多かった。好いた客との心中行為や、足抜け（逃亡行為）失敗による折檻などが原因である。反対に年季まで生き抜いた遊女に関しては、吉原内での再就職か吉原関係者との結婚、あるいは武家などで妾・女房になるなどの選択を迫られた。

遊郭に訪れる客は、買春だけでなく、客同士の交流・接待の場としても利用した。そのため、遊女たちは茶・香・和歌・俳諧・囲碁・将棋などの教養を身に付け客に対応した。この他にも、能楽の地謡や囃子を務めることもあった。

このように、吉原は高級娼館でありながら、文化・交流の場としての側面も持っていた。



当時の人気絵師、勝川春章・北尾重政によって描かれた、遊女の日常の様子。

左図は、琴、三味線、尺八など楽器の練習をしている様子で、中には手紙を書く姿も見える。

右図は、書画をたのしんでいる様子。遊女たちの姿にはいずれもそれぞれの名が添えられている。

勝川春章・北尾重政 画『青樓美人合姿鏡 上』より

（画像：国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1288472>）

※本書は、吉原の宣伝のために、安永5年（1776）に蔦屋重三郎が、老舗木屋の山崎金兵衛と共に刊行した多色刷絵本。

三巻構成で、上・中巻は遊女達の日常の姿を描き、下巻巻末には、遊女たちの作った俳諧も掲載している。

（担当：文学部史学科4回生 中島小春）

江戸の出版界を切り拓いた蔦重

—『吉原細見』から始まる事業拡大と多角化の歩み—

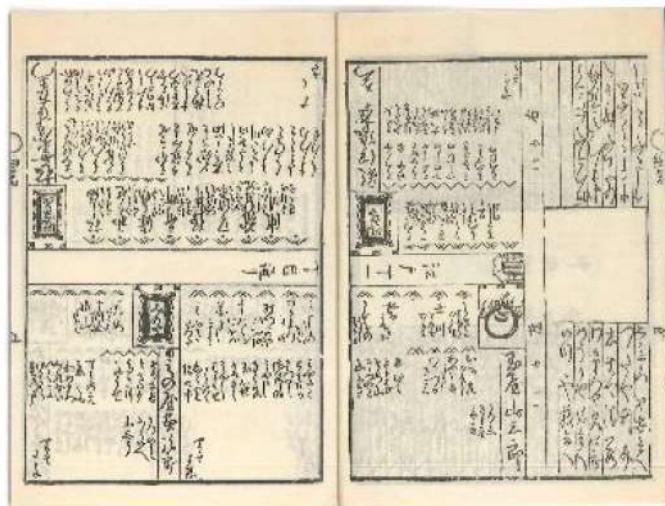
蔦重は、安永元年（1772）、21歳のときに義兄・蔦屋次郎兵衛の店先を借り、貸本屋を開業した。当初は好色本や『吉原細見』などを扱っていたが、細見の信頼性向上のため、序文を人気浄瑠璃作家・福内鬼外（平賀源内）に依頼し、話題性を生んだことで細見のイメージアップに成功した。

安永3年（1774）、細見の出版権を取得し、「蔦屋耕書堂」名義で発行を開始。判型を大きくし、ページ数を減らすことでコストを抑えた。同年、『一目千本』を刊行して本格的に出版業に参入。翌年には『籬の花』を発行し、細見の出版権を全て掌握した。その後も『青楼美人合姿鏡』などの豪華本や戯作を次々に刊行し、地本問屋としての地位を築いた。

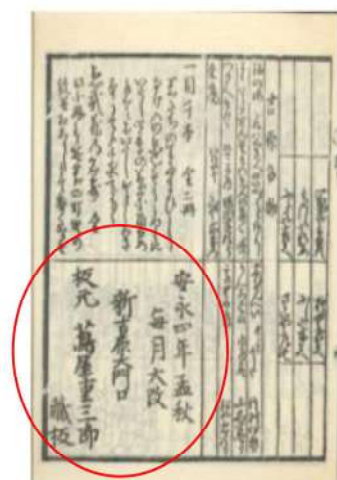
安永6年（1777）、浄瑠璃「富本節」の太夫・富本豊前太夫と独占契約を結び、楽譜や稽古本の出版を継続的に行うようになった。この時期から黄表紙や往来物にも着手し、特に毎年改訂される往来物は安定した売上を支えるロングセラーとなった。

天明3年（1783）、日本橋通油町に進出し、地本問屋としての基盤を確立。同年には「蔦唐丸」と号し、狂歌師としても活動を開始した。この年の出版物『吉原傾城新美人合自筆鏡』は、特大判と精緻な摺りで注目を集めた。

その後も吉原大門近くの旧店舗を出店として維持し、巻末広告などを活用して効率的な販売網を構築した。寛政3年（1791）には学術書を扱う「書物問屋」に加入し、学問的書籍の出版にも着手することで事業の多角化と経営の安定化を図った。



蔦重が初めて出版した吉原のガイドブック「吉原細見」『籬の花』
江戸町一丁目通りという道をはさんで両側に並ぶ店が配置されており、
所属する遊女の名前と格式が列挙してある。



同書巻末の刊記
「安永四年孟秋／毎月大改／
新吉原大門口／
板元 蔦屋重三郎／蔵板」

※画像：花咲一男編『安永期吉原細見集』（昭和57年刊）所収『籬の花』より

（担当：文学部史学科4回生 平田彩華）

江戸の出版事情 ―制度と流通、そして「読む文化」の広がり―

江戸時代の本屋は、書籍を販売するだけでなく、版元として自ら出版し、卸売まで行う存在であった。出版される書物の内容は多様で、学問・宗教・古典から、庶民の娯楽である草双紙（赤本・黄表紙など）、芸能・音楽、教科書にあたる往来物、さらには浮世絵の一枚摺まで広がっていた。

これらの書籍は、書物屋や草紙屋など、専門の本屋を通じて流通した。出版は自由ではなく、「書物問屋仲間」と呼ばれる同業組合に所属することが前提であった。出版の許可を得るには、草稿を提出し、内容点検と奉行所への申請、許可後の手数料納付など、厳格な手続きが必要とされた。出版禁止の対象には、幕府批判や他人の出版権を侵す内容が含まれ、統制と保護の両面から制度が機能していた。また、書籍は高価であったため、庶民には貸本屋の利用が一般的であった。これにより「借りて読む」文化が定着し、読書が広く普及した。

18世紀末には、寛政の改革により娯楽出版が抑制される一方、学問や教養への関心が高まり、実用的な書物の需要が増加した。出版市場の構造は変化し、武家や地方書店も流通に加わることで、知の広がりを支えた。

寛政も寛政3年（1791）に書物問屋に加入し、全国規模の出版流通に参入した。制度と需要が結びつく中で、江戸の出版文化は一層の発展を遂げ、「本を読むこと」はより身近な営みとなっていった。



「ハイ、又あのほかにも
おもしろいほんができました
あつたにやうく
もつてまいります」

挿絵に見える貸本屋の姿：

右端、本を入れた背の高い木箱の風呂敷包みを背負っている男性

〔画像〕 乾坤坊良斎作・北尾重政二世画『寛政秘談冬過月 6巻』より

葛屋吉蔵、文政12年（1829）（国立国会図書館デジタルコレクション）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/10301172/1/23>

（担当：文学部史学科4回生 平田彩華）

（史学科作成パネル 各セクションタイトルデザイン：稗田 芽依）

【主な参考文献等（パネル中に記載のものは除く）】

〔歴史関係〕

- ・岩橋勝「近世三貨制度の成立と崩壊 ―銀目空位化への道―」（『松山大学論集』1999年、11巻4号 pp.171-204）
- ・笹山晴生ほか著『詳説日本史 日本史B 改訂版』（山川出版社、2017年）
- ・佐藤信ほか著『詳説日本史 日本史探求 改訂版』（山川出版社、2023年）
- ・東建コーポレーション株式会社・一般財団法人「刀剣ワールド財団」・株式会社東通エージェンシー共同制作、
「浮世絵を学ぶ／浮世絵と錦絵の違い」、刀剣ワールド浮世絵、
<https://www.touken-world-ukiyoe.jp/learn/ukiyoe-nishikie-chigai/>（参照2025年8月5日）
- ・同上「日本史／合戦歴史年表／天明の大飢饉」、刀剣ワールド、<https://www.touken-world.jp/tips/11110/>
（参照2025年9月1日）
- ・NHK総合テレビジョン（2025年9月14日放映）、^{おうむがえしぶんぶのふたみち}「鸚鵡返文武二道」、『べらぼうな笑い ～黄表紙・江戸の奇想天外物語!』、[テレビ]、東京
- ・NHK総合テレビジョン（2025年9月7日放映）、^{ぶんぶにどうまんごくとうし}「文武二道万石通」、『べらぼうな笑い ～黄表紙・江戸の奇想天外物語!』、[テレビ]、東京
- ・国立国会図書館NDLギャラリー展示「時代の風雲児 蔦谷重三郎」、NDLギャラリー（デジタルコンテンツ）、
https://ndlsearch.ndl.go.jp/gallery/gallery_exhibitions/202502（参照2025年9月10日）
- ・同上「オランダを通して世界をのぞく 知識を世界に求めて―明治維新前後の翻訳事情―」、同上、
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/gallery/exhibit2022/111>（参照2025年9月10日）

〔狂歌関係〕

- ・小林ふみ子「大田南畝晩年の狂歌」（『日本文学誌要』2012年、86巻、法政大学国文学会）
- ・菅 竹浦『近世狂歌史』（日新書院、1940年）

- ・鈴木俊幸『葛屋重三郎』（平凡社新書、2024年）
- ・鈴木俊幸監修『別冊太陽 日本のこころ319 葛屋重三郎—時代を変えた江戸の本屋—』（平凡社、2024年）
- ・棚橋正博ほか編『日本古典文学全集79 黄表紙・川柳・狂歌』（小学館、1999年）
- ・矢野寛一・長友千代治『日本文学説林』（和泉書院、1986年）
- ・『日本古典文学大辞典』（岩波書店）
- ・東建コーポレーション株式会社・一般財団法人「刀剣ワールド財団」・株式会社東通エージェンシー共同制作、
「浮世絵を学ぶ／浮世絵と錦絵の違い」、刀剣ワールド浮世絵、
<https://www.touken-world-ukiyoe.jp/learn/ukiyoe-nishikie-chigai/>（参照2025年8月5日）
- ・名古屋刀剣博物館／名古屋刀剣ワールド、「2025年 大河ドラマ べらぼう～葛屋重栄華乃夢嘶～」第12章「葛屋重三郎」の出版基礎知識」より
「狂歌本・狂歌とは」<https://www.meihaku.jp/berabou/kyokabon/>（参照2025年9月12日）
「葛屋重三郎と大田南畝の作品」<https://www.meihaku.jp/berabou/tsutaju-otananpo/>（参照2025年9月12日）

〔戯作関係〕

- ・内田啓一『江戸の出版事情』（青幻舎、2007年）
- ・小池正胤『「むだ」と「うがち」の江戸絵本：黄表紙名作選』（笠間書院、2011年）
- ・鈴木俊幸『「葛重版」の世界 江戸庶民は何に熱狂したか』（NHK 出版、2025年）
- ・小池藤五郎『山東京伝』（吉川弘文館、1961年）
- ・佐藤至子『葛屋重三郎の時代 狂歌・戯作・浮世絵の12人』（KADOKAWA、2024年）
- ・佐藤至子『江戸の出版統制 弾圧に翻弄された戯作者たち』（吉川弘文館、2017年）
- ・楊曉捷『戯れる江戸の文字絵 一十返舎一九「文字の知画」 よみがえる大衆の笑い』（マール社、2022年）
- ・棚橋正博『十返舎一九：笑いの戯作者』（新典社、1999年）

〔浮世絵関係〕

- ・小林忠（他）『浮世絵の歴史』（美術出版社、1998年）
- ・佐藤至子『葛屋重三郎の時代 狂歌・戯作・浮世絵の12人』（角川文庫、2024年）
- ・小林忠『浮世絵師列伝』（平凡社、2005年）
- ・鈴木俊幸監修『別冊太陽 日本のこころ319 葛屋重三郎—時代を変えた江戸の本屋—』（平凡社、2024年）

〔吉原関係〕

- ・鈴木俊幸『葛屋重三郎 時代を変えた江戸の本屋』平凡社、2024年
- ・車浮代『Art of 葛重 葛屋重三郎 仕事の軌跡』笠間書院、2024年
- ・鈴木俊幸監修『別冊太陽 日本のこころ319 葛屋重三郎—時代を変えた江戸の本屋—』（平凡社、2024年）
- ・鈴木俊幸『葛屋重三郎 時代を変えた江戸の本屋』平凡社、2024年
- ・田辺昌子『もっと知りたい葛屋重三郎 錦絵黄金期の立役者』東京美術、2024年

「葛重」と仲間たち ～時代と文化のネットワーク～ 展示図録

会場 神戸女子大学古典芸能研究センター展示室
期間 2025年9月30日（火）～12月19日（金）

編集 神戸女子大学古典芸能研究センター
(担当：大山範子)

〒650-0004 神戸市中央区中山手通2丁目23-1
神戸女子大学教育センター2階



※本図録は古典芸能研究センターのホームページでPDF公開しています。
<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/index.html>